

輪島市皆月日吉神社山王祭

フォトエスノグラフィー 準備編



川村清志・倉本啓之編
地域文化研究フィールドノーツNT(1)

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」
「地域における歴史文化研究拠点の構築」ユニット活動成果報告集

輪島市皆月日吉神社山王祭

フォトエスノグラフィイー
準備編

目次

● はじめに	4
● 地域と祭りの概要	6
皆月の概要	6
祭りの行事次第	7
本書の構成	9
1 宮仕事	11
幕のタケ切り	12
オリナワとナットウ	14
ヌイゴ	17
2 御幣 <small>ごへい</small> ギリコ	18
御幣ギリコ組立て前図	19
御幣ギリコ完成図	23
奉灯	24
3 旗 <small>はた</small> ギリコ	26
旗ギリコ作業前図	27
旗ギリコの設置	31
4 鳥居	36
鳥居作業前図	36
鳥居の組立て	40
鳥居完成図	44
5 ボンボリ、曳山運行時刻表、提灯	46



ボンボリ
曳山運行時刻表

提灯

6 タケだしとタケ飾り……………

タケだし

ハタダケとダシダケ

ハタダケとダシダケのモデル

タケ飾り

7 申子と松、アテ葉……………

8 バンナラシ……………

9 御仮屋、人足仕事……………

10 曳山タテ……………

11 ネジんカキとダシオコシ……………

車軸のネジんカキ

前後のネジんカキ

天守閣のネジんカキ

ダシダケ

ダシオコシ

ネジんカキ・ダシオコシ作業完成図

タケ割り

12 曳山飾り……………

ヤマの幕とヒヨコダシ

その他の準備

92 84 83 82 81 80 79 78 77 76 74 69 65 64 62 59 57 54 52 52 49 48 46

● はじめに

本ブックレットは、石川県輪島市門前町皆月の山王祭を対象としたフォトエスノグラフィである。この成果は、人間文化機構と国立歴史民俗博物館が推進する「地域における歴史文化研究拠点の構築プロジェクト」の中間発表としての意味を持つ。

そもそも皆月を含む旧門前町七浦地区では、研究副代表の川村清志が、一九九〇年代の始めから継続的なフィールドワークを行ってきた。調査は、当時の大阪大学文学部小松和彦（現国際日本文化研究センター所長）ゼミナールのフィールドワークの一環として始められたものである。ゼミナールとしての集団調査は三年で終了し、成果物も刊行されたが、川村は現在まで継続して祭りや儀礼、口頭伝承の調査を行ってきた。また、二〇〇六年度から二〇一一年にかけては、赴任していた札幌大学文化学部のゼミナールで、この山王祭に学生とともに参与するようになった。このブックレットに採用した写真の何枚かは、その際に学生たちによって記録されたものも含まれる。さらに二〇一四年からは二年間にわたり、国立歴史民俗博物館の民俗研究映像制作のための現地調査が行われた。この過程で祭りを運営する地元の青年会員たちと綿密な連携体制をとるとともに、作品の制作にも協力を仰ぐことになった。その成果は二〇一六年度に発表した『明日に向かって曳け―輪島市皆月山王祭の現在』に結実している。

この一連の活動は、文化人類学におけるフィールドワークの基礎である参与観察の延長として捉えてきた。異文化研究を専らとする文化人類学では、対象とする社会の理解のために、彼らの言語を習得し、その生活空間に居住し、五感を持って当該文化を理解することを研究の柱としている。対象となる人びととの信頼関係を構築することが何よりも重要であり、必

要な資料だけをピックアップしたり、特定の期間に特定の儀礼や伝承を記録することは、場合によっては、当該文化の全体性の理解を損なうものであると考えられてきた。そのような視点を自文化に向けて行ってきた調査であったが、そこには、現在進行しているプロジェクトが目指す「研究拠点」を考えるうえでの大きなヒントがあると考えている。

本プロジェクトには、地域文化の拠点をどの位相に位置づけるのかという課題がある。研究者たちが収集し、整理し、意味づけてきた文化の内実を、地域社会のどのような立場の人々に送り返すのかという問題である。これまで研究プロジェクトでは、地域の博物館や資料館が、文化研究のフロントラインであり、同時にストックヤードであると捉えてきた。研究者間のネットワークを充実し、博物館・資料館の連携を密にすることによって、研究手法のバージョンアップを図るとともに、その発信を促すことは重要な課題である。また、博物館・資料館とともに各地の教育委員会なども、地域での研究・調査の窓口として、これまでもしばしば連携と協力を仰いできた。そのようなつながりをより実践的な形態でネットワーク化することも本研究の狙いである。

しかし、博物館や資料館は、決して文化の担い手自身にはなれない。担い手とは、地域に住み日々の生活の中で文化を継承し、発展させる立場にある人びとである。とりわけかつての生活文化の諸相を積極的に受け止め、継承しようとする人たちがこそ、研究者がこれまで培ってきた成果を、送り返す対象としてふさわしい拠点たりうるのではないだろうか。ここで注目されるのが、地域社会の中で組織化されてきた公民館活動、青年会や各種の保存会、さらには消防団といった自治的な組織の存在である。これらの組織は、一方がかつての民俗学が研究対象としてきた儀礼集団や村の社会組織と重なり合っている。他方でそれらの組織は、近現代のマクロな社会動態の中で、再編され新たに意味づけられてきた側面も有する。このよう

な再編過程で人々は、自分たちの生活文化と向かい合い、それらを発展的に継承するための方途を探りつつある。同時に彼らは、先に述べた博物館・資料館や教育委員会とも直接、間接的に関わりをもつことが多い。その意味でも、このような担い手こそが、地域の生活文化の研究拠点のより実践的なネットワークになりうると考えられる。

映像制作の過程で痛感したのも、自分たちの文化を再認識し、再創造しようとする人々の意志であった。彼らは多様な選択の中から祭りの継承や存続に汗を流し、自らの生活の一部としている。その意味で祭りは、無意識的な継承や慣習的な実践ではありえないのである。ここで重要な点は、文化の継承と再創造に際しては、研究者がまとめた都合の良い面だけをピックアップするわけにはいかないことである。これまでの研究者たちが地域にフィールドバックする文化の大半は、基本的には「文化財」とほぼ同義であった。ナショナルなレベルで価値づけうる、歴史的で伝統的で他地域に対して優越するような文化資源が強調されてきた。

茅葺き民家や柵田のような文化的景観の保存を提唱する研究者は多い。何百年も続く祭りの存続を求める研究者もいくらでもいる。しかし、民家や柵田を維持する労力やそのための経済的な裏づけまで保証してくれる研究者は、ほぼ、いない。祭りを継承する社会が直面する過疎化や高齢化の問題に対して、有効な手立てを提案できる研究者もいない。もちろんそれは、研究者だけの問題ではない。それらは当該社会を組みこんだよりマクロな社会における構造的、全体的な課題である。ただだからといって問題を投げ出していいわけではない。

確かなことは、地域の人びとが直面する問題とは、かつて営まれてきた文化と、今日、彼らが置かれている状況とが矛盾し、齟齬をきたし、軋轢を生じさせている現実である。この実状に踏み止まり、これまでの研究成果とそこで露わになった課題の両面を送り返すことで、はじめてわれわれ

は、生きられた文化としての地域文化の継承と発展に立ち会い、真の意味での連携とコラボレーションを実践することができると考える。

そのような試みの一つとして本ブックレットは位置づけられる。ここで紹介するのは、皆月山王祭の準備次第に関するものである。既存の祭り・祭礼研究では、これらの準備過程は看過されがちであった。せいぜい研究報告の序盤で、付加的に紹介されるに過ぎない。しかし過疎化、高齢化が進む皆月では、準備過程の継承と改変こそが祭りの存続に直結する問題である。このブックレットに示した準備のいくつかが継続不可能になれば、山王祭自体の存続が危ういものとなる。近年における祭りの準備過程をできるだけ具体的に示し、地域社会に送り返す必要が急務となっている。

このブックレットでも現地との協力体制はより緊密なものとなっている。とりわけ元青年会長であり、輪島市職員でもある倉本啓之には最終的には共編者となってもらい、編集と校正全般に携わってもらった。皆月青年会の役員には、作業の撮影、各項目の確認、校正にも協力いただいた。末尾に記したが、地元の多くの方から画像資料も提供していただいている。ちなみにこのブックレットは、これで完結ということにはならない。言うまでもないが、祭り当日の詳細な記録は現地の人々が望むものである。これについては、この続編となるブックレットにおいて紹介することにした。また、明治以前からこの祭りは、多くの変遷を経て今日まで続けられてきた。地域の中には高度経済成長期、あるいはそれ以前の祭りについての多くの記録が残されている。当時の文書記録、画像資料などを収集することで、山王祭の変遷を明らかにすることができると考えている。このような祭りの歴史的背景についても、新たに紹介したいと考えている。

● 地域と祭りの概要

皆月の概要

皆月は、日本海を臨む小さな入江沿いに広がる集落である。石川県の能登半島の外浦に位置し、耕作に適した平地は多くない。海岸部と川沿いの比較的開けた場所に家々が軒を連ねている。

村は、北からニシデ（西町）、本町、デム（ブ）ラ（河南）に分かれる。デムラと本町は、皆月川で隔てられて南がデムラ、北が本町である。本町とニシデは、日吉神社（後述）から下る坂道沿いの家より北がニシデになる。今は暗渠になっているが、この道沿いにも小川が流れている。三つの地区は、ほぼ各々の谷筋によって区分されている。ただし、坂の上の神社の横の数軒の家はニシデに属している。かつてニシデの裏山の一部が崩れたため、数世帯がこの場所に移ってきたためである。なお皆月では、自治組織の長として区長がおり、その下に一〇人の組親がいる。一〇の組のうち、一〜四組がデムラ、五〜七組が本町、そして、八〜一〇組がニシデに分かれる。

明治期から、皆月は旧鳳至郡七浦村の中心的な集落であった。七浦村は、一九二一（明治二二）年の市町村令にもとづいて成立した。戦後の町村合併によって周辺の町村とともに旧門前町に編入されたのは一九五四（昭和二九）年のことである。その門前町も平成の大合併を機に、二〇〇六（平成一八）年、輪島市に編入された。市域となっても村の過疎化・高齢化に歯止めはかかっていない。戦後の多い時期は、三〇〇軒近くあった世帯が、現在では一〇〇軒をきっている。

七浦地区は全部で一三の集落からなっていた。皆月と同じ入江の周りには、餅田、鶴山、さらに五十洲の集落があり、岬を一つ隔てた南

側の海辺には吉浦の集落がある。山沿いの集落として、百成大角間、井守上坂、中谷内、大滝、矢徳、樽見、暮坂、薄野の各集落がある。薄野や樽見、暮坂は戸数が五軒をきっており、独居世帯も多い。村落の存在自体が風前の灯火となっている。その他の集落も多くは一〇軒前後、皆月について大きな集落であった五十洲も四〇軒をきり、三〇代以下の青年層が一人も見あたらない。

一九五〇年代の後半まで皆月をはじめとする七浦沿岸部の村々では、親方子方制度によるイワシの刺し網漁が盛んに行われていた。船を所有する親方が、数軒の家を子方として雇い、沿岸部で漁をするというものであった。漁期は四〜六月で、ちょうどイワシの産卵期と重なっていた。しかし、潮流の変化や大型船の進出にともなう漁獲高の激減のため、漁の運営が困難になる。全ての親方の家が船を手放した



0-1 輪島市門前町皆月付近図（国土地理院を元に作成）

のは一九六〇年代の中頃であった。その後、多くの者が海外航路の船乗りとして村を後にすることになる。旧門前町全体では船会社に勤める者が八〇〇人を超えた時期もあり、親戚や近隣の縁故を頼って職についた者も多かったようである。

それでも一九九〇年代の中頃までは、二トンから五トンのクラスの船で、タチウオを中心とする延縄漁や刺し網漁に従事する漁師の家が一〇軒以上あった。しかし、漁を続ける者も年々減少していき、現在では、刺し網や釣漁を行う家が数軒ある程度である。

もともと皆月には平地が少なく、戦前から稲作よりも畑作が中心であった。豆類やイモ類を中心に各種の野菜類が栽培されているが、大半は自家消費で、わずかにジャガイモなどを農協に出荷している。農作物に関しては七浦の他の地域もほぼ皆月と同じような状況にある。近年ではわずかな水田も放置されたり、畑に切りかえられることが多い。稲の栽培には、周年を通じて手間がかかり、その人手がないためである。

皆月には、地域の人々の日常生活を送るための商店や施設が集まっていた。日常雑貨店や酒屋が数軒ずつあったほか、農協、郵便局などの公共施設が設置されていた。小、中学校、公民館なども村落に隣接していた。その他に二軒の旅館と三軒の民宿が営まれ、村のはずれのコウラケダと呼ばれる高台には、国民休暇村が開設されたこともあった。



0-2 皆月日吉神社全景

しかし、現在、営業している酒屋は一軒のみである。雑貨屋も一軒を残して店を閉じた。七浦小学校、中学校は共に廃校となり、かつての中学校が、現在は七浦公民館として利用されている。二軒の旅館、三軒の民宿も実質的に営業を休止している。昔からの常連が泊まりに來たり、村で法事などがあれば、料理を提供するくらいである。

なお、村内には三つの寺院（全て真宗大谷派）があるほか、旧七浦村の村社であった日吉神社と、神明社の二つの社殿が鎮座する。三つの寺の中で善行寺は、本町の坂の上に位置する。皆月でも檀家数が一番多い。妙行寺は、皆月新橋をデムラ側に進み、正面の路地を上がった所に藁を構える。もう一つの超願寺も、デムラの丘の中腹に立っている。日吉神社は、本町とニシデの境となる坂道を上った丘の上にある。ここまで上がると先の善行寺は、日吉神社より少しくだった本町側に本堂を構えていることがわかる。また、デムラの神明社は、妙行寺と超願寺の中ほどの丘の上にある小さな社である。日吉神社とこの神明社だけでなく、七浦の各村落の神社は、皆月の番場家が社家として、祭式を執り行う。

祭りの行事次第

皆月が唯一賑わうのが、八月一〇日、一日の山王祭の祭日である。山王祭は、村を見下ろす小高い丘の上にある日吉神社の夏祭りである。日吉神社は、山王権現を祀るかつての旧七浦村の村社であった。祭りの際には、境内や宮

に上る坂が祭りの主要な舞台になるだけでなく、祭りの準備に関わる諸々の作業も、主にこの場所で行われてきた。

山王祭で中心的な行事は、村落内を回る曳山ヤマ引きと神輿みこしの行列である。一日の午前九時すぎ、神職による神事とともに宵祭りよいまつりは始まる。それに先立って子供たちが「ヤマ引きにでてくんせつし〜」と言って村落の中を回る。舟形の上下二層式になったヤマには、シタヤマに小学生が乗りこんで鉦かねや小太鼓こたいこ、横笛よこふエを演じ、タカヤマに中学生が上がって、タケの立て下ろしなどの仕事をこなしていく。ヤマを引くのは主に青年会のOBである壮年層の男性である。

ヤマは午前中に村落の北側を移動し、休憩きゅうけいをはさんだ午後五時から、村落の南側を回る。その後、海岸道路でヤマ全体に提灯を灯し、村の中心部の海岸近くに設置された御飯屋おかりやまで引かれていく。この提灯ちようちんを点灯したヤマの姿は、山王祭のなかでもっとも有名なシーンの一つとなっている。一方、神輿みこしの行列は、午後四時すぎに神社を出発し、ヤマと同じ経路で村落内を巡る。この間、御神体みかみにゆかりのある岩と井戸に対しての神事が行われる。途中でヤマに追いついた神輿の行列は、そのまま一つの行列となり、午後八時すぎに御飯屋に入る。御飯屋では神輿みこし入りの前に、御幣ごひいギリコのお向かえと馬駆けうまかけの神事が行われていた。

翌日の本祭りでは、午前中に御飯屋へのお参りが行われ、ヤマ引きは午後二時から始まる。一時間遅れて、神輿



の行列も御飯屋を出発する。ヤマと神輿みこしは主に村落の中心部を巡ったあと神社に戻る。村の中を回る際には「ヤツサー」が行われ、オオテブリによるヤマの方向転換も行われる。「ヤツサー」は、タカヤマの前面に青年会員たちが出張り、かけ声をあげながら、ヤマの上で暴れることを指す。一方、オオテブリは、テコの原理でヤマの方向を変え、力をかけて回すことで、ヤマの方向が修正される。こうして宮の坂を上りきり、神社の境内けいんでもう一度馬駆けが行われる。このあと、御飯屋と同じく神輿みこしが宮と鳥居の間を三往復して宮に納まり、祭りは終了する。

かつてこの山王祭では、祭り当日の一週間前から準備が始まっていた。準備に携わる組織は大まかに三つに分かれる。まず子供会があり、皆月の小学四年生から中学三年までの少年男子によって構成される。

次が青年会である。これは中学卒業後、三七才までの男性が所属する。最後の人足にんそくは地理的に三つに区分されていた。既述したように皆月は村落の北からニシデ（西町）、本町、デムラ（河南）の三つの地区に分かれて各々の班を構成しており、これが毎年交代で祭りの準備に携わっていた。かつての皆月では、三年に一度、祭りの準備の分担が回ってきたことになる。

ただし、祭りの準備の大半は、子供会と青年会が行っていた。人足の仕事が実質的に八日、九日に集中しているのに対して、子供会と地元在住の青年会員は、四日から休みなく作業をこなさなければならぬ。さらに祭り前日から宵祭りよいまつりの朝

にかけて、子供たちはほぼ徹夜で準備に従事した。約三〇年前まで彼らは、祭りの準備のために神社の拝殿に泊りこみで作業を行っていたのである。

しかし、二〇〇〇年代のはじめに皆月では、準備に携わる小、中学生がいなくなる。結果として祭りの準備の多くを、青年会と人足に割りふる必要に迫られた。しかし、青年会でも地元在住の会員が減少を続けており、準備期間にコンスタントに皆月で作業することができなくなった。そこで青年会では、かつての子供たちが行っていた一連の宮仕事を、祭りの二週間前と一週間前の週末に行っている。

他方で人足の割りふりもこれまでのような三班体制を維持できなくなっていた。班によって世帯の減少や高齢化の著しいところがあったためである。そこで各組ごとに一日二人ずつ、計二〇人の人足が出て、毎年、合同で祭りの準備にあたることが決められた。本ブックレットでは、この体制で行われるようになった二〇一〇年代以後を中心に、近年の山王祭の準備過程を紹介することにした。

本書の構成

本書は、基本的に近年の準備期間を時系列にそって紹介していく。また、作業が集中する八月の八日、九日については、青年会や人足といった主体となる集団ごとに紹介することにした。



0-3 宵祭り。ヤマに続く神輿の一行

すでに述べたように近年では祭りの二週間前の週末から祭りの準備が始められる。最初に紹介するのが、かつて中学生までの子供たちが宮で行っていた準備作業である。幕を通すためのタケ(笹)切り、オリナワやナットウなどのワラ縄、タケやアテの葉を結わえるヌイゴなどの準備などがある。また、この日に宮の倉庫に保管されているキリコや鳥居の木枠を水洗いし、一週間前には、ヤマの組立てを行う。最初にこれらかつての宮仕事の概要を紹介する。

次に八月四日から進められる奉灯貼りの作業をみていく。御幣ギリコ、旗ギリコ、鳥居の各部位の貼りつけを主に地元在住の青年会員とそのOBが行う。現在、作業は皆月の集会所で行なわれる。また、提灯と電池式のロウソク、ボンボリの点検と補修や貼りつけも並行して行う。

八月八、九日の作業としては、タケダシとタケ飾り、御飯屋の組立て、ヤマの各部を固定するネジンカキやダシオコシなどの作業を説明しておきたい。作業の手順を説明する関係上、曳山タテについても、ネジンカキの直前に紹介することになる。

最後に、八月一〇日の早朝に行われるヤマ飾りの作業がある。個々に作業を行ってきた幕やヒヨコダシ、タケやアテ葉、サルコをつけた松など、全ての部材がヤマに飾りつけられることになる。

主な準備作業一覧

日時	青年会	有志 (青年会 OB、 太鼓保存会、等)	人足
2週間前の週末	<ul style="list-style-type: none"> 奉灯洗い 幕のタケ切り 玉縄のチェック、注文 提灯の調達 		
1週間前の週末	<ul style="list-style-type: none"> ヤマタテ オリナワ制作 ナットウ制作 		
8月4日～9日	<ul style="list-style-type: none"> 奉灯貼り ロウソクのチェック ロウソクの入れかえと提灯のセット ボンポリ張り ボンポリ文字入れ 	<ul style="list-style-type: none"> 奉灯貼り ロウソクのチェック ロウソクの入れかえと提灯のセット ボンポリ張り ボンポリ文字入れ 曳山運行時刻表制作 	
8日	<ul style="list-style-type: none"> ネジンカキ ボンポリのスタンプ ボンポリ、運行表の色つけ 	<ul style="list-style-type: none"> ネジン綱作り ネジンカキ ボンポリのスタンプ ボンポリ、運行表の色つけ 	<ul style="list-style-type: none"> 宮掃除 旗、ヤマの松の用意 御飯屋たて、旗たて ネジン綱作り ネジンカキ 天守閣のネジンカキ
9日午前	<ul style="list-style-type: none"> タケ取り タケの切り揃え：ハタダケ、ダシダケの制作 	<ul style="list-style-type: none"> タケ取り タケの長さ揃え：ハタダケ、ダシダケの制作 	<ul style="list-style-type: none"> アテ葉のサルコつけ ハタ、吹き流しの括りつけ ダシダケ編み
9日午後	<ul style="list-style-type: none"> ダシオコシ ヤマ下ろし（鳥居の前までヤマを下ろす） 鳥居の部分組立て 	<ul style="list-style-type: none"> ダシオコシ ヤマ下ろし（鳥居の前までヤマを下ろす） 鳥居の部分組立て 	<ul style="list-style-type: none"> ダシオコシ オシミの滑り止めつけ ヤマ下ろし（鳥居の前までヤマを下ろす）
10日	<ul style="list-style-type: none"> ヤマ飾り 旗キリコの設置 御幣ギリコの組立て 鳥居の組立て 	<ul style="list-style-type: none"> ヤマ飾り 旗キリコの設置 御幣ギリコの組立て 鳥居の組立て 	

※ ネジンカキや御飯屋の作業は、年によって作業する日に変動がある



0-6 神社倉庫内(3)、右手は奉灯の木枠、奥には天守閣



0-5 神社倉庫内(2)、ハタ、吹き流し、サルコ（申子）などの箱



0-4 神社倉庫内(1)、御飯屋（右側）とヤマの部材（左側）

1 宮仕事

ここで宮仕事として一括したものは、かつて中学生までの子供たちが行なっていた準備作業を指す。ヒヨコダシを縛るミツナワ編みやヌイゴの切りそろえ、幕を通すためのタケ(笹)切り、オリナワやナツトウなどの藁縄の準備が含まれる。このうちミツナワ編みは、手間がかかるため、近年は作られておらず、祭りの際には市販のロープを補強して使っている。

現在、これらの作業は、祭りの二週間前の週末に行われる。まず、奉灯類の水洗いを行い、和紙の貼りつけや組立てを行う集会所まで運んでおく。この後、幕用のタケ切りに行く。タケ切りにはある程度の人数が必要である。その後、ワラ縄がすでに発注されていたり、昨年の残りが多かったりする場合には、オリナワとナツトウを製作する。年によってはこの時点で必要なワラ縄やサイザル縄を数えて、発注することもある。

ヤマの面幕と桐幕とに使うタケは、皆月の周囲に自生しているニガタケ(メダケ)である。分類学上は笹の仲間になり、成長しても幹に粗皮が残る。ニガタケは、畑の縁や丘陵部、河川敷などいたるところに見られるが、ある程度の太さと弾力がないと幕には使えない。かつては宮の周りにも太いニガタケが生えていたというが、現在では細いタケの茂みしか見当たらない。そこで、皆月やその周辺部に残るよく茂ったヤブを探すことになる。

幕用にはタケが三〇本ほど必要とされる。長さは約二メートル、径二センチほどである。あまり径が大きいと幕の乳を通せないが、成長したニガタケでも、それ以上太くなるものは少ない。



1-0 取ってきた幕のタケ

□ 幕^{マク}のタケ切り □



1-1



1-3



1-2

1-1~3 本文でも記したが、太ったニガタケを得るためにはよく茂ったヤブを探さなければならない。しかし、よく茂ったヤブにはほぼ間違いなく、あまり出会いたくない生き物がある。藪蚊^{やぶか}などはおとなしいほうで、この時期には、マクタケ切りの大きな障害となるアブやハチがいる。それがわかっている青年会員たちは、できるだけヤブに入らずに遠くから暖かい視線を送る。やがて痺れ^{しび}を切らした者が一人二人とヤブに入っていく、その勇気を表面上は称賛される。さらに狡知^{こつち}にとんだ者は、ヤブの外で切ったタケを預かる係を引き受け、ヤブに入った者が作業を終えるまで出られなくしてしまう。彼らのチームワークは鉄壁^{てつぺき}である



1-4 宮の向かいの山でタケを切り出している様子



1-5 先の部分や枝など使わない部分は現地で切り落とす



1-6 切り出したタケは、一まとめにして宮に運ぶ。昔はすぐに粗皮をむいたが、今は祭りまで日があるので、陰干しして外しやすくする

一二ページは、皆月に隣接する集落の鶴山から百成大角間に向かう傾斜地のヤブでニガタケを取っている場面である。神社からも一キロほど離れている。子供たちが準備をしていた頃は、宮の倉庫にあった一輪車を出してタケを運んでいた。現在では軽トラックを移動と運搬に用いる。多少離れていても、車で現地にいくこの場所は、都合が良いようである。ちなみに一三ページの写真1は、二〇一一年、日吉神社の向かいの山の麓でのニガタケ採集の様子である。ここへは車での移動ができないため、以後、採集は行われていない。ニガタケのうち節や粗皮の綺麗なものは選ばない。それらはその年

にはえた若タケのため、柔らかすぎて幕用には使えないからである。また、節が途中で曲がっているものも使えない。幕の乳に通すことができないからである。同じ理由であまりに太いものも使えないが、とりあえず切り出して、利用できる長さを調整することになる。宮に持ち帰ったタケは、陰干しして乾燥させる。次の機会には、粗皮をできるだけ綺麗に剥がして、長さを揃えて切ることになる。



1-7

□ オリナワとナットウ □

オリナワとナットウは、ともに市販（しはん）のワラ縄を加工して作る。かつてオリナワは主に小学生が作り、少し複雑なナットウは、中学生の仕事であった。ワラ縄は、皆月内の農協から購入することが多いが、手に入らない時期は、隣の穴水町（あなみずまち）まで買いに行くこともあった。

オリナワは、主にタカヤマでタケを結んで固定するときに使う。シダケの根元の固定に始まり、松や人形飾り（かざり）にもオリナワを用いる。ヤマの運行中にタケを倒してヤマの両側に固定する際にも、たくさん

のオリナワを使う。村の中を曳山が運行する際には、電線があるため、竹を全て倒す必要があるからである。

オリナワの製作は以下の通りである。まず、ワラ縄フタヒロ半分（ヒトヒロは人が両手を横に伸ばした長さ）をはかり、その長さに合わせて二人を立たせ、ワラ縄を往復させる（写真1-6）。二〇往復ほどした時点で両端を切り揃え（そろ）ると、一定の長さの縄ができる（写真1-10）。この作業を三から四回繰り返して、オリナワのもとを準備する。この短い縄の一方の端を手で持ち、肘（ひじ）に引っかけて三、四回巻いて輪を作る。とけないように端を結べばできあがりである。



1-8 購入されたばかりのワラ縄



1-9 測った長さに合わせて人を立たせ、ワラ縄を往復させる



1-10 長さを合わせて両端を切り揃える



1-11 オリナワの作り方の指導

ナットウは、オリナワよりもかなり長い。八月一〇日の宵祭りよいまつりの夜、提灯ちょうちんを灯す時に、このナットウを用いる。ナットウをダシダケの端から初めて、ハタダケをへて反対のダシダケまで、一巻きずつさせながら横に伸ばしていく。タケとタケの間のナワに一つずつ、提灯ちょうちんを飾りつける。

ナットウは、①まず、オリナワと同じ手順で作ったものを伸ばして芯にする。②次にその芯に沿ってワラ縄をコイルのように巻いていく。③端まで巻いていくと今度は折り返して、重ねて巻いていく。ただし、



1-12 まとめられたオリナワ。これで100個ある



1-13 完成したナットウ。人により長さにばらつきがあることがわかる

端の部分は最後に縄を結ぶのに使うので数センチ余らせる。④二往復巻きあげると、縄が緩まないように、両端に縄の残りを通して固定する。

近年ではオリナワとナットウは祭りの一週間前の週末に作る。オリナワは一二〇から一五〇ほど、ナットウは二二から二五個ぐらい作る。青年会員は事前にワラ縄の昨年の残りを数え、作業に必要な分を注文しておかなければならない。提灯ちょうちんなどを括るのに使うヌイゴの元になるサイザル縄も同様である。



1-16



1-14



1-17



1-15

1-14～17 ナットウは宵祭りの夜、提灯を飾る時に用いるワラ縄の通称である。納豆を入れる藁苞わらづとに似ているためについた名前だが、命名されたのはそれほど古いことではない。タケに巻きながらタカヤマの端から端まで張るため、かなりの長さが必要になる。両側に4段から5段ずつ、さらにヤマの前後にも使うので、10数個、用意しておく。

ナットウは、①まず、オリナワと同じ手順で作ったものを伸ばして芯にする。②次にその芯に沿ってワラナワをコイルのように巻いていく。③端まで巻いていくと今度は折り返して、重ねて巻いていく。ただし、端の部分は最後にワラを結ぶのに使うので数センチ余らせる。④2往復巻きあげると、縄が緩まないように、両端にワラの残りを通して固定する

□
ヌイゴ
□



1-20



1-18 市販のサイザル縄。ここからヌイゴやミツナワを作る



1-21

1-20,21 ヌイゴは肩幅を少し超えるくらい、だいたい1m前後に切りそろえるというが、個人差はある。切りそろえたヌイゴは、タカヤマの天守閣の横に結わえて使えるようにしておく



1-19 かつてヒヨコダシの取りつけに使われていたミツナワ。これらも小・中学生がヌイゴを編んで製作していた。さらに時代がさかのぼると、カラムシの繊維を編んで作っていたという

2 御幣ギリコ

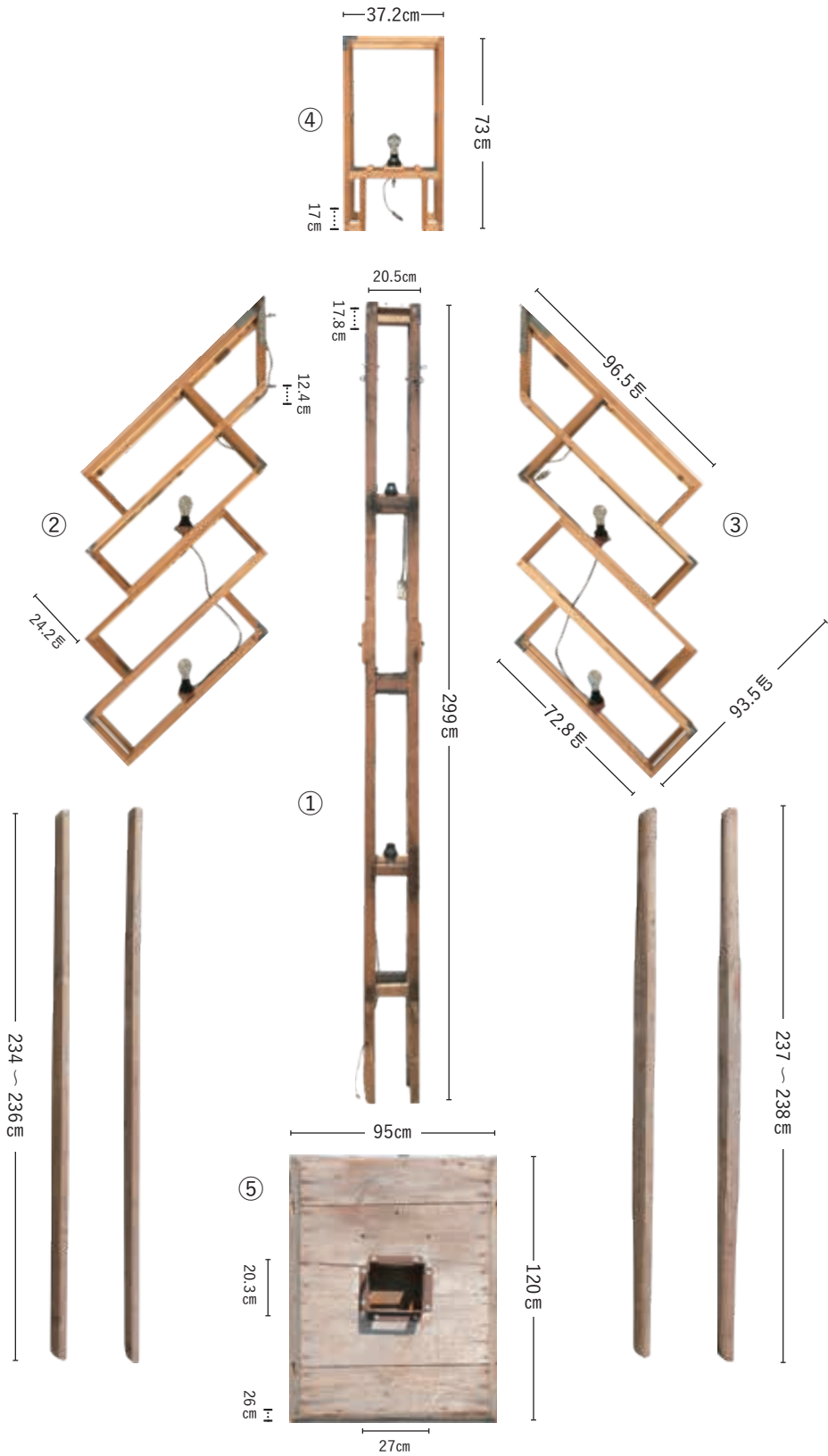
御幣ギリコは、文字通り御幣の形をかたどった高さ三・五メートルほどのギリコである。このギリコを木の台に据え、その台に前後左右に二本ずつ、計四本の横棒を差しこんで若い衆が担ぐ。宵祭りの夜に御仮屋と鳥居の間で神輿を迎えるために三往復する。御幣ギリコは神輿の神様を迎えにあげるのだから、御仮屋から神輿の待つ鳥居の前まではゆっくりと、鳥居から御仮屋までは掛け声と共に駆けぬける。

このギリコは、五つのパーツに分かれている。軸となる細長い方形の部分①、紙垂をかたどった左右の凹凸のある部分②、③、カシラとなる凹型の部分④、そして台座の部分である⑤。台座を除く各部分には、電球のソケットがつけられており、各パーツからはコードがでている。祭りの時には電源となるバッテリーが、台座に置かれてバンセンで固定されている。また、木の台座と御幣ギリコ全体もバンセンで固定されることになる。さらに縄をカシラと軸の接合付近に結びつけ、バランスをとるオシミとして利用する。これらの固定作業は、宵祭りの昼休み中に行われる。



2-0 キリコを台座に据える

□ 御幣ギリコ 組立て前図 □





2-1～3 かつての御幣ギリコの組立てと接続の様子。和紙を貼り終えると、組立ても行った。基本的に各パーツは、番線を使って固定する。紙垂の部分と柱、カシラの部分と柱も全てパンセンを通して固定した。そのため年によっては、カシラがやや傾いて見えることもあった



2-4～6 これは、御幣ギリコの補修の様子である。2013（平成 25）年にマンタカ（島本家）が担当した。カシラの部分と両側の紙垂にあたる部分は、完全に新調されている。本体の部分もカシラとジョイントし易いように上部が加工された。これによって本体とカシラの部分、また、本体と紙垂の部分もボルトで留めることができるようになり、パンセンでの作業が軽減された



2-7



2-8



2-9

2-7～9 かつての御幣ギリコにオシミを結んでいる。カシラの根元部分にワラナワを結びつけ、4方のオシミを作る。これは、宵祭りのときに御幣ギリコを担ぐ際のバランスを保つナワである

御幣ギリコの準備は、八月四日から始まる青年会の作業の中で行われる。最初に木枠ごとに和紙を貼りつける。次に各々のパーツをバンセンでくりつけて固定する。多少、和紙に穴をあけることになるが、遠目に見ると目立たないので、これらの部分に特に補修はない。括りつけたバンセンはニッパで何度も巻きあげて固定する(写真2-10)。

ただし、これらの作業は二〇一三年のギリコの補修以後、大幅に軽減された(写真2-11)。

八月一〇日、宵祭りの午前中の運行が終わると青年会員たちは、御飯屋の周辺でギリコと鳥居の組立てと飾りつけをおこなう。御幣ギ

リコのセッティングも、それらの作業の一環である。ギリコのカシラと軸のあたりにワラ縄を結びつける。前後左右の四本である。

その作業が終わると、接合部分に負荷がかからないようにゆっくりと持ちあげ、台座の部分に組み合わせる。台座には、鉄製の受け口があり、そこにギリコの軸を差しこんで固定する(写真2-10、14)。また、台座にはあらかじめ、前後左右に二本ずつ持ち手用の棒をさしておく。さらに台座に小型のバッテリーを取りつけて、ギリコの電線とつなげる。ギリコの電球がつくかどうかを確認すれば、準備完了である。



2-12



2-10



2-13



2-11

2-10~13 御幣ギリコを立てて、台座に固定する作業。
油断すると接合部の鉄線が曲がって、和紙が破れたり、最悪、外れてしまうこともある



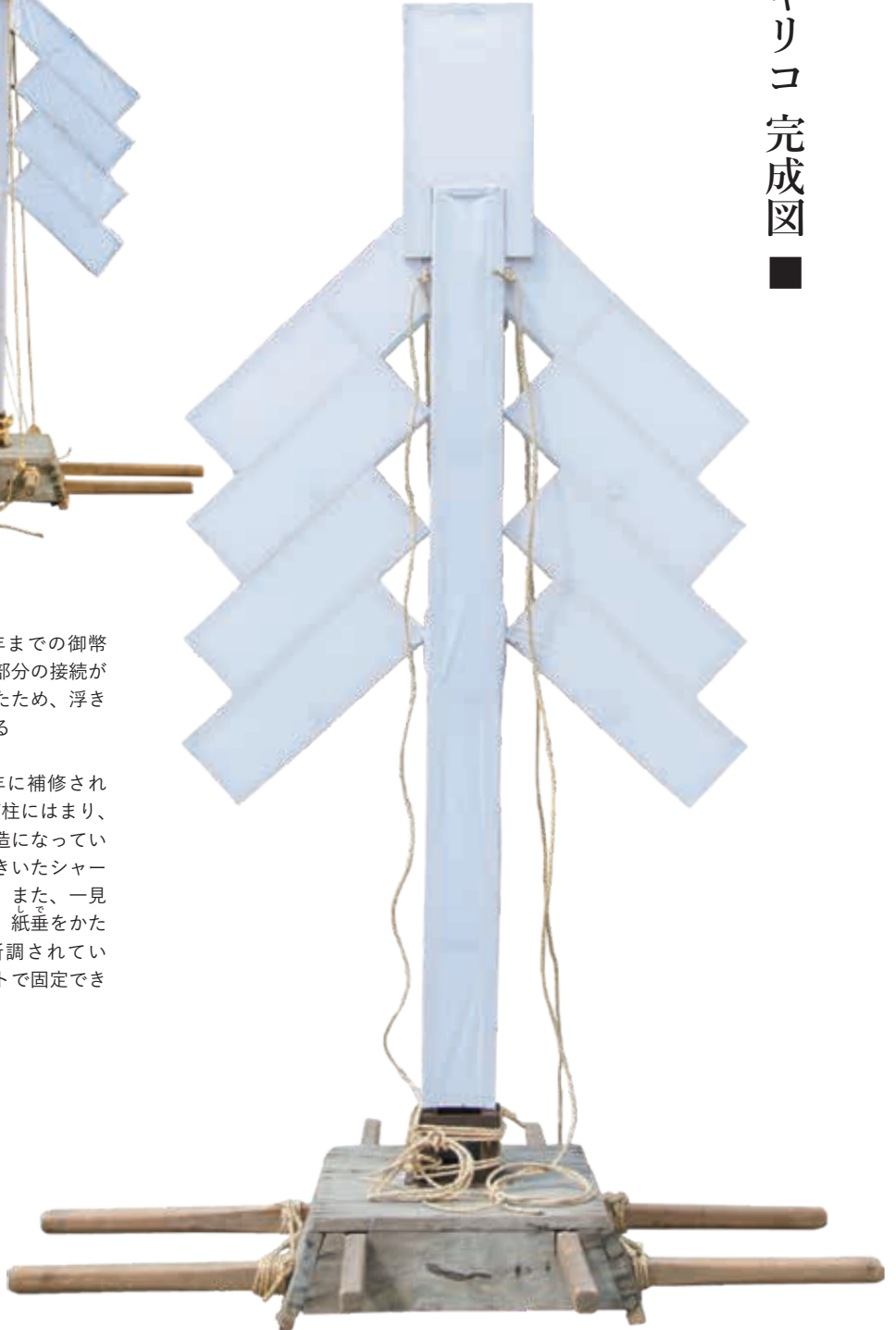
2-14 オシミの張り具合を確認して、バランスをとる。この後、バッテリーを台座に取りつける

■ 御幣ギリコ 完成図 ■



上：2012（平成24）年までの御幣ギリコ。カシラと柱の部分の接続がバンセンで行われていたため、浮きあがって不安定に見える

右：2013（平成25）年に補修された御幣ギリコ。カシラが柱にはまり、ボルトで固定できる構造になっている。見た目もエッジがきいたシャープなフォルムになった。また、一見すると分かりにくいですが、紙垂をかたどった両側の部分も新調されている。こちらも柱とボルトで固定できるようになった





2-15 宵祭りの夜、御飯屋からお迎えに向かう御幣ギリコ。鳥居の手前では、神輿の一行が待機している



2-16 集会所の納戸に仕舞われている奉灯や大提灯。部屋の天井の関係で、宝珠の部分は外して保管している

□ 奉灯 □

本来、青年会が担当する「奉灯貼り」という作業の名前は、御飯屋の前を飾る四基の奉灯に由来していたはずである。

かつてはパーツごとに分けて、毎年、和紙を貼り、御飯屋前で組立てていた。奉灯は、重石以外に宝珠、笠、火袋、中台、竿、基礎、基盤の七つのパーツに分かれており、笠の部分などには、かなり複雑な曲面が含まれている（写真2-17）。これらの曲面に和紙を貼るには独特の作業手順が必要であった。しかし、二〇〇三（平成一五）年に奉灯が新調された際には、防水加工を施した和紙が貼られて、複数年の使用が可能となった。現在は、御飯屋が設置される場所に近い集会所内に保管されている。

これらの管理は、奉灯を製作した地区の者に皆月区が委託しているため、基本的に青年会は関与しない。宵祭りの準備の際に集会所から



2-17 現在の奉灯の正面図。各部の取り外しは可能だが、ほとんど取り外すことはない。火袋の火窓の位置は、宮の灯笼の形式に準じる

の運び出しを手伝う程度である。これら四基の奉灯の貼りかえを省略できるようなっただけでも、青年会の準備作業は大幅に軽減されたといえる。

写真2-17のように奉灯は、屋根（笠）の上部と重石とをバンセンで接続して固定している。そこで、移動の際には、この笠の部分までを一体で運び出すほうが良い。しかし、年によって、笠や中台より下の部分を分けて運び出すことも多い。そうすると火袋の方向が、あやまって据えられることもある。実は写真2-15と2-17の火袋の部分では方向にズレが生じている。

なお、いちばん上につける宝珠の部分は、普段から外した状態で保管している。運ぶ際にも落下の恐れがあるので、御仮屋前に本体を設置してから、つけ直すことになる。また、複数年度の使用に耐える一方で、雨ざらしにすることができない。祭りの前後で降雨があった場合には、速やかに御仮屋の中や集会所に、運びこまなければならぬ。

3 旗キリコ

旗キリコは、御仮屋の前に飾る設置型のキリコである。祭り
の日には、海側、山側に計二基が飾られる。高さ四七九・五cm、
横一〇八・五cm、厚さ二六・三cmである。皆月のキリコではもっ
とも大きく、文字通り旗をイメージした長方形のキリコであ
る。長方形の貼り紙の部分は旗の本体を示し、向かって右側に
等間隔で空いた六つの方形は、旗の乳を表している。ここに和
紙を貼ることで、柱に旗を通した姿を再現している。同様にキ
リコの上部の二つの方形も乳である。よって、上部にある横棒
は、旗のカンザシをかたどったものだろう。

準備の基本は他のキリコや鳥居と同じく、木枠に和紙を貼る。
ただし、軸棒を差しこむ部分は、強度をあげるために木枠の比
率が高い。そのため、全体の重量はかなり重くなっている。

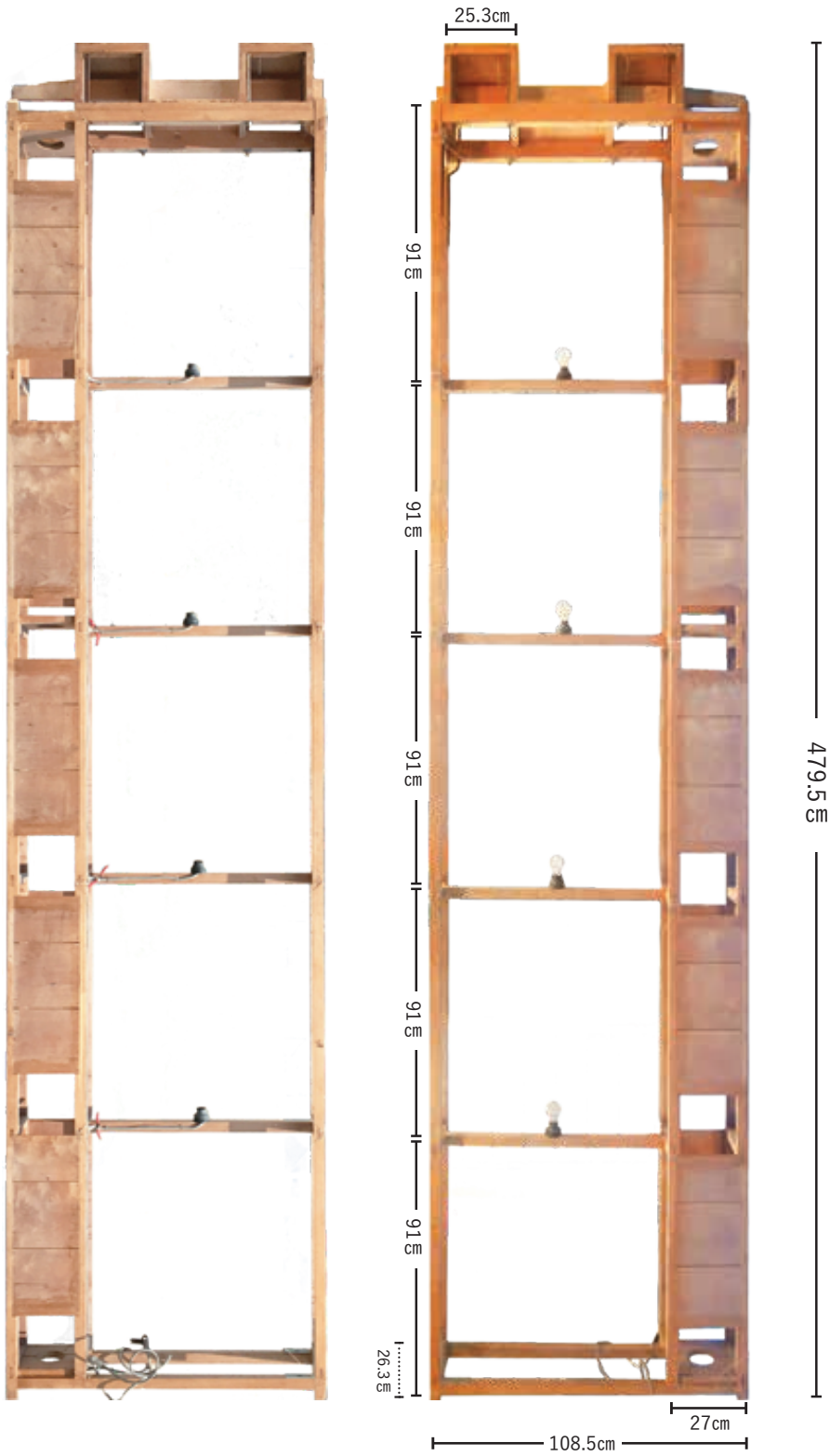
最初にメートル法でキリコの大きさを示したが、実際の制作
は尺貫法を用いて作られたようである。というのは、乳の部位
を除いた長方形の部分は、ちょうど縦が二間半、横が半間の長
さだからである。よって、縦の木枠ごとの幅も半間であること
がわかる。

旗キリコは、裏面に電球のコードをはわせて目立たなくして
いる。(次ページの作業前図を参照)。各コードは軸を通す木組
みに添って配され、下部で一本になっている。

キリコの部分には、障子紙を貼りつける。また、木枠の柵目
ごとには、タコ糸が交差して張られている。立てたキリコに風
の圧力がかかり、紙が破れるのを防ぐためである。



3-0 旗キリコを立てる



□ 旗キリコ 作業前図 □

裏面

正面





3-1 水洗いが終わり、集会所の駐車場で乾かされていた旗キリコの木枠



3-2 旗キリコの広い面は、障子紙しょうじがみをそのまま伸ばす。接着面が少ないため慎重しんちょうに木部に貼りつける

この旗キリコには朱墨しゅぼくで、「御神燈ごしんとう」と大きく書かれ、下に細字で「青年会」と記される（写真3-0、3-18）。

この字を書く係は、時代ごとにほぼ決まっていた。一九八〇年代から二〇〇〇年代までは、本町の政木喜久雄さんがその役を担っていた。準備期間の後半、八月の八日か九日の間に、書かれることが多かった。青年会が事前にお願いにいき、字が書けるようにキリコを横に倒して、足場の用意もしておいた。「御神燈」の字は非常に大きいため、小型のホウキを筆に用いていた（写真3-9）。また、祭りの後には、音頭おんどと取りやテブリの係と同様に、酒一升いっしょうをお礼にもっていく。

二〇一四（平成二六）年からこの係は、当時、会長を務めていた島本真吾が担当している。彼は普段は金沢の会社に勤務している。そのため文字の下書きは、彼の父が行い、それを見本として真吾が書いていた。朱墨の文字は祭りの準備期間の前に書いてあるので、青年会では、すでに文字が書かれた障子紙しょうじがみを木枠きわくに貼りつけることになる。しかし、二〇一七年の祭りでは、かつてと同じように枠に貼られた障子紙に、直接、文字が記された（写真3-3）。



3-3 この年、初めて、旗キリコに張った障子紙しょうじがみでの清書ちようせんに挑戦した島本真吾元会長（2017年撮影）



3-5 弘法も筆のあやまり。アイカメラに記録された映像には、残念な瞬間が残されていた



3-6 朱墨と小ボウキ、かつての係はこの小ボウキで字を書いていた



3-4 朱墨しゅぼくをとく。筆はネットで購入したそうである。年によっては食紅が使われたこともあるが、色が薄く見栄えがよくなかった



3-8



3-7

3-7 旗キリコに軸棒を通す。軸棒を通すキリコには、節があるため、あたらないように慎重に通していく

3-8 軸棒の先とキリコのパーツをワラ縄で固定する

3-9 キリコの橋を支柱の側まで動かし、カンザシの部分には滑車から下りているロープの一方を結びつけ、軸棒の部分にはバンセンを余裕をもって、幾重にも巻いていく。軸近くのカンザシにもロープを結ぶことがある

3-10,11 バンセンの輪が引っかからないように、補助の棒で押し上げながら、キリコを立てていく。3-11では、バンセンを押し上げて調整している

3-12 オシミを三方から引っ張り、キリコを立てる。

3-13 右上のあたり、支柱に取りつけられた滑車かっしやの様子、真下に伸びるロープを係が引っ張っている

3-14 キリコを立てるとともに、軸の部分に柱に近づけていき、柱の重石の上にキリコの軸棒を据える



3-9



3-10



3-13



3-11



3-14



3-12

□ 旗キリコの設置 □

御幣ごひギリコの準備が、四、五人で行われるのに対して、旗キリコには一〇人前後が集まる。旗キリコを実際にもちあげる者が四、五人おり、軸棒じくぼうをコントロールする者や支柱のロープを三方から固定する係も必要だからである。もつとも、軸棒じくぼうを通す作業や軸棒とキリコの上部を結びつける作業に、それほど人数は必要ない。むしろ、技能に長けた者に任せることも多い。

最初に二つの旗キリコを御仮屋前に運び出し、乳ちちをかたどった部分を下にして立てる。ここに旗キリコ用の



3-16,17 軸棒^{おもし}に乗せてバランスと方向を調整し、ロープとワラナワで支柱に固定する



3-15 軸が上までいくと慎重にキリコを重石^{おもし}の上におく

軸棒^{じくぼう}を差しこむ(写真①)。ちなみに旗キリコの支柱は、すでに人足によってオカリヤ前に立てられている。重石^{おもし}にはめこまれ、三方からロープで固定されている。

旗キリコの軸棒^{じくぼう}の先の三〇cmほどは、半円状に削^{ひず}られている。この部分が削られていないと旗キリコの上部の薄い板につかえてしまう。おそらく、この板は、旗の横軸となる「カンザシ」をかたどったものだろう。その部分を重ね合わせ、ワラ縄でしっかりと固定する(写真②)。次に旗キリコを横に動かし、固定部を支柱の根元まで近づける。この部分と支柱にバンセンを通し、四、五回巻きこむ。バンセンは支柱を接続するとともに、旗をあげる際のタガの役割を果たすので、強く巻くことはない。また、カンザシの中央部にロープを結びつけて固定する。このロープは、支柱の上部に取りつけられた滑車^{かっしや}につながっている(写真③)。この滑車から伸びるロープを受け持つ引き手がおり、旗キリコを上向きに引きあげることになる。

準備が整うと会員たち七、八人が前後からキリコを押しあげる。同時にバンセンをタケの棒^{ぼう}などで押しあげる。力を入れる向きがずれると、バンセンが支柱に引っ掛^か



り動かなくなる。直接手で触れると危険なので、タケや木の棒を使って押しあげていく。キリコを徐々に立てながら支柱に近づけ、最後に重石の上に軸棒をのせる。軸棒と支柱をロープとワラ縄で強く固定すれば完成である（写真3-16, 17）。

旗キリコは、必ず支柱よりも海側に据える。御仮屋を正面から見れば、左側に旗キリコが位置する。山から海に向かうアイの風に吹かれているように配置するのである。もちろん「御神燈 青年会」と書か

れたほうが、表にならねばならない。さらに旗キリコを立てる際には、支柱のロープを三方から張りなおして調整する。旗キリコが横に立てられた分、支柱の重心も変わるためである。以上の作業をもう一度繰り返せば、二本の旗キリコが、御仮屋の前、四対の奉納旗と奉灯の間に並ぶことになる。

3-18 完成した旗キリコ
(2017年の旗キリコ)



3-19 宵祭りの午後7時すぎ、ヤマがデムラで提灯を灯し、御仮屋を目指して移動を始める。同じ頃、まだ人のまばらな御仮屋でも、旗キリコや奉灯に明かりが点される

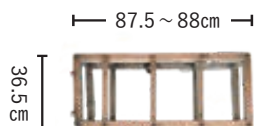
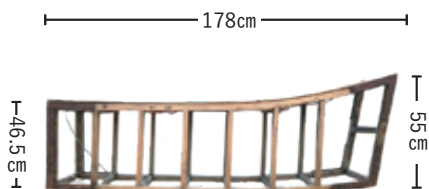


4 鳥居

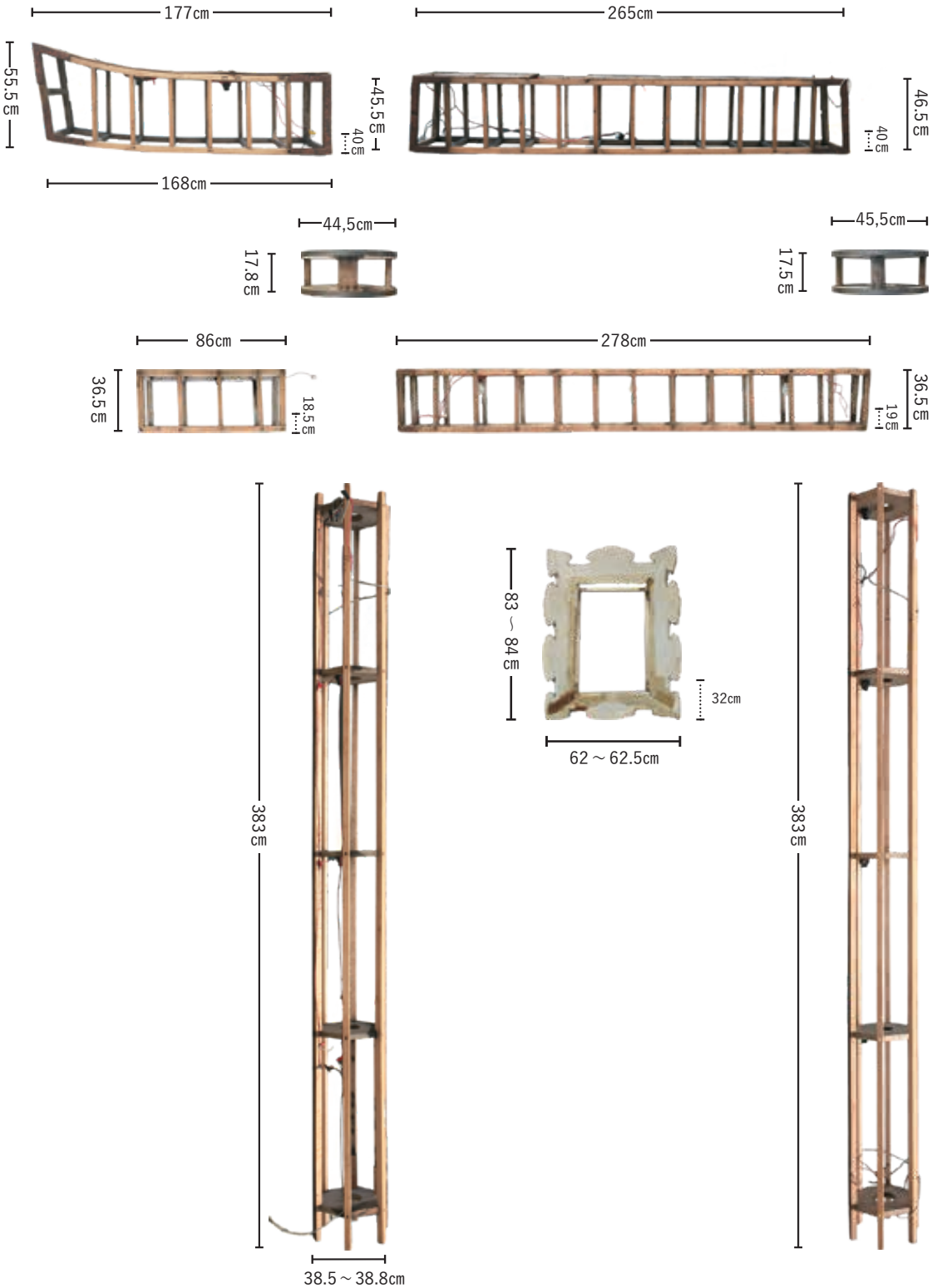
鳥居は、全部で二個のパーツからなる。奉灯貼りを行うパーツの中で、最も数が多い。主な材料は、他の奉灯やキリコと同じ木製だが、台輪や島木の一部には補強のために鉄板が貼りつけられている。各パーツは、大きさや長さに従って、障子紙やロール紙、あるいは中折を使い分ける。ただし神額は、毎年貼りかえるわけでなく、数年ごとに新しくしている。

鳥居は御飯屋からやや離れた新橋のもとに立てられる。パーツ間の接続や配線の確認、軸棒を通してからの立ちあげなど、最も人数と手間のかかる作業である。

□ 鳥居作業前図 □



4-0 10日の午後、鳥居を立ちあげる





4-1 貫への貼りつけ



4-3 柱



4-2 島木

4-1～3 各々のパーツには幅や長さに合わせて異なる用紙を使う。上と右下の鳥居のパーツは、障子紙しょうじがみを使って貼りつける。左下の鳥居の柱は、六角形の面ごとにロール紙を用いて貼りつけていく。縦に長いパーツはこのロール紙がよく用いられる。30年ほど前までは、ほとんどのパーツに中折を何枚も重ねて貼っていたという



4-5 ボルトの確認



4-4 島木の接合



4-7 接合された貫と柱



4-6 柱と貫の電線の接続

4-4～7 近年では、鳥居の一部をあらかじめ組み合わせておく。御仮屋を立てる場所に近い集会所での準備になったため、可能となった作業である。①、②島木の3つのパーツは、ボルトで固定され、さらにバンセンで補強される。④貫の横側と柱も事前にバンセンで組み合わせる。③その際、電球用のソケットの接続も忘れてはならない。この作業により、10日の午前中^{かんわ}の組立て作業が大幅に緩和され、限られた人数でも実施できるようになった

□ 鳥居の組立て □

前ページまでで見たように、あらかじめ鳥木は三つのパーツを接続し、貫の横側（木鼻）と柱もバンセンで組み合わせる。この時点でパーツは七個に減っている。これらのパーツを集会所から運び出す。それを地面の所定の位置においた様子が四一ページである。

この時、鳥木の接続部はあらかじめ紙をはがしている（写真4-13）。ボルトで固定する際に切り取ったものだが、軸棒を通す際にも位置を調整するのに役立つ。貫の長い部分と柱の接続も行う。これは位置を調整しながら、バンセンでつなぎとめる。神額は、鳥木と貫の中間あたりに配置するが、これも経験的なものである。四二ページにあるように神額の電灯は、鳥木から電線を接続している（写真4-14）。電気



4-8 補修された神額の後部



4-9 和紙を貼りなおす



4-8～10 神額の縁は、木組みと厚紙で作られており、毎年、張りかえられるわけではない。上の写真は黄ばみがひどく、土台の補修も必要であった2013（平成25）年の様子である

が通っているかどうかを確認するために、灯りをつけているのがわかる。この電灯を神額の上から挿入すれば、鳥居を立てた時には、穴は見えない。

旗キリコなどの作業が終わり、鳥居の組立てに人数が揃ってくると、柱に軸棒を通す作業にはいる。慎重に柱と台輪を通し、最後に鳥木の穴を通す。無事に軸棒が通ると突き出た端には松を結びつけておく。また、貫の下には神主が用意した注連縄を張っておく。

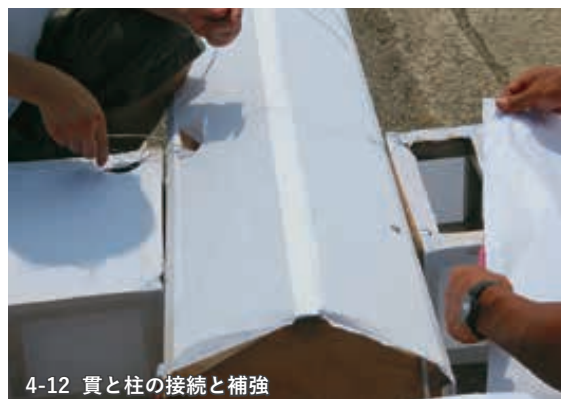
また、円形の重石を所定の柱の根元部分に配置する。ちなみに奉納旗や旗キリコなどを含めた全ての重石は、普段は、新橋のたもとに置かれている。他方で軸棒は、集会所の裏にまとめて保管されている。各部の接続を確認し、各々の電灯が点灯するかどうかの確認が終われば、いよいよ鳥居を立てる作業にはいる。



4-11 地面に並べられた鳥居のパーツ



4-13 鳥木と柱の接続の確認



4-12 貫と柱の接続と補強



4-14 各パーツの確認



4-16 神額接続の準備



4-15 柱を持ち上げて接続する場所を確認する



4-17 柱に軸棒を通し、持ちあげる準備をする

この段階で軸棒じくぼうの下部に重石おもしを近づける。重石おもしは柱よりも直径が大きいので、軸棒を通す穴の位置がずれてしまふ。そのため、最初に軸棒を通すことができないのである。軸棒自体を持ち上げなければならないため、柱や台輪だいりんも一定の傾斜けいしゃをつける必要がある。そのため写真写真のように一本の柱に五、六名の人員を配置しないとイケない。軸棒じくぼうを重石の穴にはめると、そのままゆっくりと鳥居全体を立ちあげていく。この時、一本の軸棒につき三方からオシミのロープを準備しておく。柱は両側を同じベースで立てないとゆがみが出て、接続部に負荷がかかる。油断すると紙が破れたり、接続部がゆがんだりすることもある。会長や役員が両側の力のかけ具合やオシミを張る方角を指示していく。

鳥居が立ちあがると橋の欄干らんかんや電信柱、間垣まがきなどにオシミを結びつけて固定する。



4-18 重石^{おもし}を支えながら鳥居を立て始める

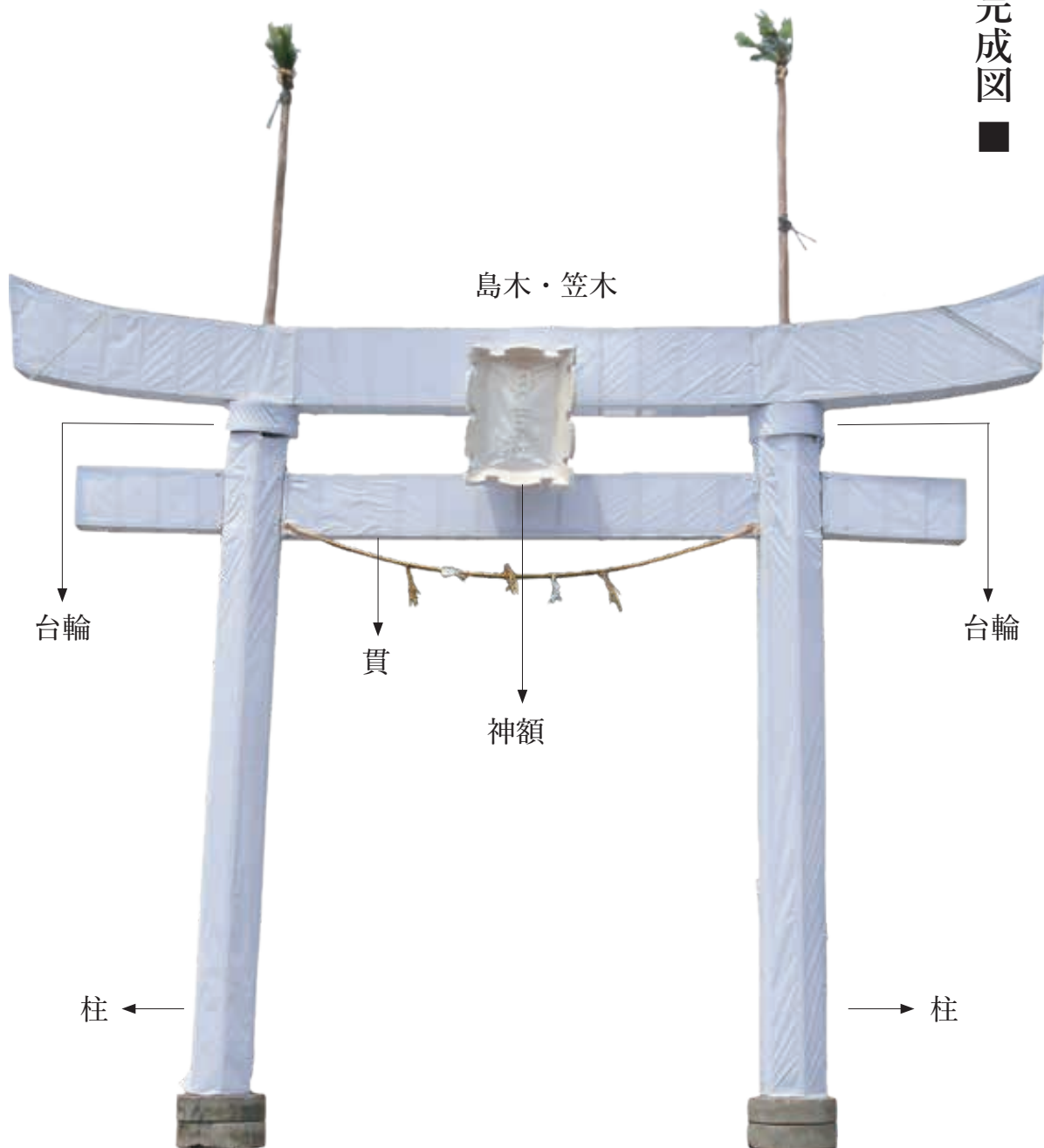


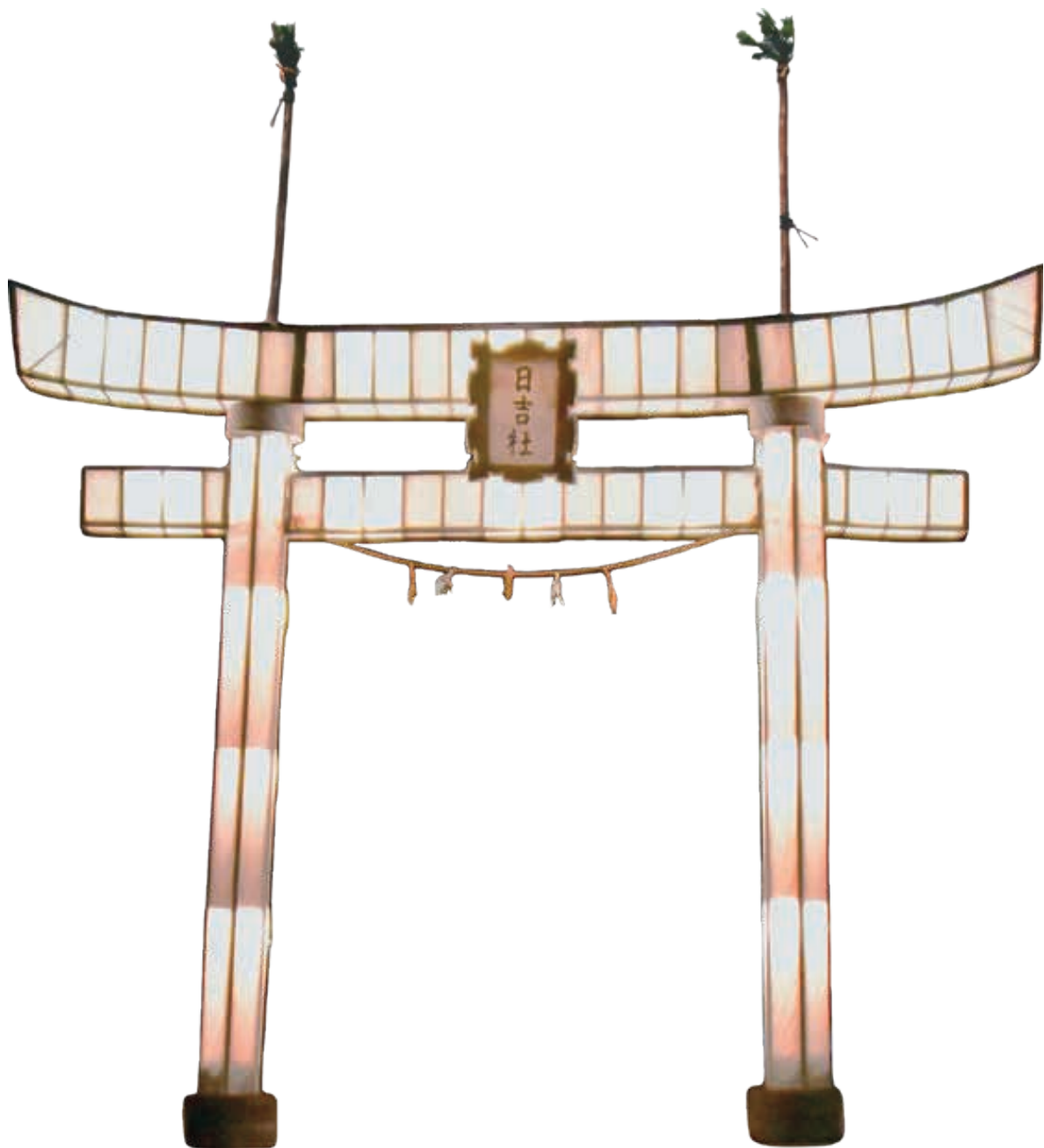
4-19 海側、山側のバランスを取りつつ慎重に立てる。役員たちの指示の音が響く



4-20 立て終わり、支柱のロープを三方から張って安定させる。しばし、見惚れる

■ 鳥居完成図 ■





5 ボンボリ、曳山運行時刻表、 提灯ちようちん



5-0 新橋のたもとから皆月橋側に続くボンボリの様子。向かいの家屋には運行表が貼られているのがみえる

□ ボンボリ □

皆月川にかかる二つの橋に沿って、約四〇個のボンボリが飾られる。このボンボリも、青年会によって準備されている。ボンボリは大小二種類あり、大が三個、小が三八个ある。

ボンボリの紙を貼る部分は六面あり、毎年、紙を張りかえる。半紙一枚からボンボリ二面分がかろうじてとれる。そのため、型の型がプラスチックを切り抜いて作られている（写真①）。

半紙を貼り終えてノリが乾くと、余った部分を切り取る。形を整えたと墨で文字を入れる。皆月青年会が最も多く、火の用心、海上安全、商売繁盛、五穀豊穰といった一般的な熟語も多い。文字は一面おきに三カ所書きこむ。残りの面には、日吉神社の紋である巴の印を押しつけていく。これらの作業の後、噴霧器で赤と緑の色水を吹きつけ、彩りを添える。

ボンボリは、一〇日の早朝に橋の周囲に飾りつける。橋の欄干と河岸の柵に一定の間隔で柱を固定し、その柱の間にワラ縄を通す。このワラ縄にボンボリを結びつける。この作業の時間帯は、ヤマ飾りと重なっている。そのため、長年、村のなかで作業に慣れた者に青年会が委託していた。二〇一六（平成二八）年からは青年会が、再び作業を担当するようになった。



5-2 この時は、ロール紙を用いている



5-1 型に合わせて半紙を切る



5-3 ポンポリへの貼りつけ作業



5-5 色つけ作業



5-4 巴の判を押す

写真 5-1～2 まず、ポンポリ用の型に合わせて半紙を切る。律儀に型に合わせて半紙から2枚分取れないので、やや小さめに切ることもある。5-3、型紙に合わせて切った紙をポンポリの6面に貼りつける。はみ出た部分は乾いてからカッターで切る。5-4のように一面おきに文字を書き入れ、残りの部分に巴の印ともしを押す。5-5、最後に食紅と食緑ともえを水で溶いたものを吹きかける

□ 曳山運行時刻表 □

運行時刻表は三枚作成し、ニシデ、本町、デムラとそれぞれ貼る場所が決まっている。ニシデは、ギョウモシントク横、本町は皆月橋のたもとの寺二家の納屋、そしてデムラはアサエモン（有賀家）の前である。現在、この運行表の文字は、旗キリコと同じく島本真吾が担当している。墨で書いた運行表に、ポンポリと同じように紅と緑を吹きかける。作業は八日の夜に済ませておき、九日の夕方、他の仕事が一

段落したあとで、各所に貼りつけに行く。
青年会が取りしきる曳山に関する時刻表のため、神輿の渡御の時間については記載がない。



5-7 ニシデ（ギョウモシントク横）



5-8 本町（寺二家納屋）



5-9 デムラ（アサエモン前）



5-6 運行表に色つけを行った様子

□ 提灯 □
ちようちん

提灯は、宵祭りの夜、タカヤマのタケに縄を張って飾られる。ヤマの両側には、やや細長い岐阜提灯が用いられる。ヤマの前後にも、ダシダケにナワを張り、紅白提灯という円型の提灯を飾る。岐阜提灯は左右で二〇〇から多い時で二五〇個近くを灯し、紅白提灯は、前後で七〇〜八〇個を灯している。この他にヤマの前後に二基ずつ直径四〇センチほどの大提灯を取りつける。

岐阜提灯と紅白提灯は、現在、電池式のロウソクを点灯して運行し



5-10 電池式ロウソク：単三電池 2 個を入れてフタを締めれば電気がつく。構造は懐中電灯と変わらない



5-12 紅白提灯 (径 24cm × 高さ 23cm)
紅白提灯の底にもベニア板を貼って補強する。かつては岐阜提灯、紅白提灯ともに、購入した時点で底がベニア板製だった。しかし、ある時期より、底が厚紙になったため、補強しなければならなくなった



5-11 岐阜提灯 (径 19cm × 高さ 16cm)
九寸提灯として市販される。底を木板で補強し、ロウソクを固定できるように加工している

ている。これは二〇〇三(平成一五)年から本格的に行われるようになった。それまでは、火の勢いの強い和蠟燭が用いられていた。これを用いるとロウソクに火をつける際や、運行中の揺れで提灯が焼失することが多かった。そのため、タカヤマには常に複数の子供や若い衆が乗りこみ、提灯が燃えたり、ロウソクが切れたりしないか気を配らねばならない。電池式のロウソクになってからは、それらの心配りが必要なくなったのである。また、和蠟燭を用いていた頃は、毎年、相当数の提灯を新調する必要がある。当然、ロウソクも買い換えなければならぬ。これらの経費を削減するために、電池式のロウソクの購



5-13 保管されているロウソクと乾電池



5-14 岐阜提灯の点検中



5-15 提灯の底部を補強する作業

入が決められた。実際の運行に対応したものであつた。

電池式のロウソクの導入で青年会の準備作業には、新たな手順が加わることになる。使い捨てではないため、四〇〇本購入したロウソクは、毎年、事前にチェックする必要がある。ロウソクには単三の乾電池二本が必要となる。一組の乾電池で灯せる時間ははかられ、現在では二年に一度、電池を全て交換している。電池の入れかえ作業とフィラメントの点検なども、祭りの準備期間に行うようにしている。

もう一つ、提灯にも補修が必要になった。電池式のロウソクは、かなりの重量になるため、提灯の底を補強する必要があつた。方形のべ

ニヤ板を切り出し、そこにロウソクを設置する金具を取りつけたものを提灯に接着していった。岐阜と紅白あわせて約三〇〇の提灯に、この作業を行わなければならない。ただしこの作業を行うことで、かつて子供たちが行っていた、提灯の底に砂を入れる作業は省略できるようになった。

すでに述べたように祭りの最中に提灯が燃えることはなくなった。しかし、紙製の提灯は経年の劣化で四、五年に一度は取りかえねばならない。また、ヤマが揺れる時に、ロウソクが提灯を突き破って破損させるといふ新たなケースも生じた。そのため、毎年の準備でも数十



5-16 集会所に保管されている大提灯、普段は埃^{ほこり}除けにビニールをかぶせている



5-17 宵祭りの夕方、河南にて大提灯にろうソクを灯す。大提灯は、前後に2つずつ飾る

5-18 現在では、大提灯や青年会の提灯も、ともにサイズの大きい電池式のろうソクを用いて点灯する



個の提灯については、準備段階で補修作業が必要とされている。

また、祭りの後には、ろうソクを提灯からはずして回収しなければならぬ。天候に不安のある年には、宵祭り^{よひまつり}が終わった直後にろうソクを外して回収する作業に追われることもあった。これらの作業も、青年会の役員たちが中心となってこなしている。

なお、前述したヤマの前後を飾る大提灯^{ちやうちん}(写真5-16,17)は、一〇一つが高価なため、現在は、奉灯^{ほうとう}と同じく集会所に保管されている。この他に運行時に役員達に渡される手持ちの提灯が計八個ある(写真5-18)。いずれも、「皆月青年会」と書かれている。

6 タケだしとタケ飾り

□ タケだし □

タケだしは、九日の早朝に行われる。祭り当日に曳山ヤヤマを飾るタケを運搬うんぱんする作業である。かつては子供たちの仕事であったが、一九八〇年代以後は青年会の担当となった。子供たちが担当していた頃は、夜が明ける前から徒歩で隣村の百成大角間どうのきおがくまに向かい、一軒ずつ回ってタケを切ってもらっていた。青年会の作業となつてからも、皆月の近隣きんりんから調達することはかわらない。現在は、薄野うすきのという山間やまのの集落から購入している。

タケの切り出しは、皆月区があらかじめ薄野うすきのの個人宅に依頼している。タケは一〇〇本前後を用意してもらい、タケと同様にタカヤマを飾るアテの葉も一緒に切ってもらおう。アテは「档」とも記され、ヒバの近縁種きんえんしゆのアスナロの変種である。能登のとでは、杉すぎとともによく植林される針葉樹しんようじゆである。

青年会員たちは、九日の午前五時、皆月川の新橋に集合し、車で移動する。この作業は平日になることが多く、タケだしの人員の確保に役員たちは苦労する。祭り当日の休みは取れても、前日の作業まで休みは取れず、ほとんどの会員は戻ってこれない。地元じよんに在住する青年会員も立場は同じである。しかし、作業日を事前にずらすわけにはいかない。あまり早くにタケを切り出すと、葉が枯れて散ってしまい、見栄えが悪いからである。OBの有志たちにも手伝ってもらいながら、なんとか作業を続けているのが現状である。

かつては二トントラック二台で運搬うんぱんしていたが、近年は、クレーンが装備そうびされた四トントラックを地元の建設会社から借りている。現地





6-1



6-2



6-3

- 6-1 薄野集落の道路脇に置かれた、事前に伐採されタケ
- 6-2 タケをクレーン車の近くまで運びだす。運びだす前にクレーンにつながるベルトを敷いている
- 6-3 タケを運び終わり、ベルトでタケを縛って固定するところ。他方で、クレーンの操作の準備も初めている
- 6-0 タケをクレーンで持ち上げて荷台に移動させる。2トントラックの頃は、1本ずつ荷台までタケを持ちあげていた

では、切り出されたタケがすでに道のわきに置かれていて。ただし、タケを切った場所が複数ある場合には、各々の場所を回る必要がある。青年会の仕事は、それらのタケを一カ所に集め、トラックに積みあげて固定することである。単純作業だが、力仕事のため、一定数の人手が必要になる。もともとクレーン車を使うようになってからは、タケを人力で荷台にあげる必要はなくなった。クレーンにつなげた縄の上にタケを集めて固定すれば、あとはリフトの操作でタケを持ちあげることができる。ただし、この作業には玉掛けの資格が必要なため、資格をもつ建設会社の役員に応援にきてもらっている。



6-0



6-4



6-5

6-4,5 日吉神社まで運んできたタケ（写真6-4）。クレーンを使ってタケを境内に下ろしていく（写真6-5）。撮影は、すでにネジカキとダシオコシが済まされているヤマの上から写した

積みこんだタケは、神社の境内まで運び、エビス神社の横の斜面に下ろすことが多かった。二トントラックならば境内にも入りやすかったからである。ただし二〇一七年は、境内の端にトラックを止め、タケをおろし（写真の①、②）、人力で境内に運びこんだ（写真の③）。おろしたタケは、三つ、ないしは四つのカテゴリーに分けられる。(1)幹が比較的細くてまっすぐなタケはハタダケ用に、(2)枝葉がよく茂っていて根元が太いタケはダシダケ用に分ける。(3)それほど幹が太くなく、枝葉もバランスの取れたタケを三本ほど選別する。これはゼニガタというハタダケの中央に飾るタケの候補になる。葉がついていなかったり、極端に曲がっていたりするもの、色の悪いものは廃棄する（写真の④）。ただしその一部は、ヤマの滑り止めに巻きつける竹

板に加工したり（八二ページ参照）、ヤマの上部の足場の材料（七九ページ参照）に利用することもある。ここまでで午前七時をまわることが多く、一旦、朝食をかねて作業は休憩になる。

□ ハタダケとダシダケ □

朝食後には、タケの切り揃えの作業が始まる。前述したようにほとんどの青年会員は仕事で出られないため、休みを取った数名の役員と人足たちで作業を行う。すでに選別してある三種類（実際には五種類）のタケは、用途ごとに加工の仕方が異なる。

まずハタダケは、タカヤマの両側にまっすぐに立てて飾るタケであ



6-6



6-7

6-6,7 運んできたタケを用途ごとに分けていく（写真6-6）。この時にタケの選別も行っていく。①幹が比較的細くてまっすぐなタケはハタダケ用（写真6-7中央）、②枝葉がよく茂っていて太いタケはダシダケ用に分ける（写真6-7左）。③それほど太くなく、枝葉もバランスの取れたタケを3本ほど選別する（写真6-7左上）。これはゼニガタというハタダケの中央はいきに飾るタケの候補になる。④葉がついていなかったり、極端に曲がっていたりするもの、色の悪いものは廃棄する（写真6-7右）



6-9



6-10

6-9.10 タケの下枝をナタで切り落とす。上の写真の奥では、タケの下を切りそろえている



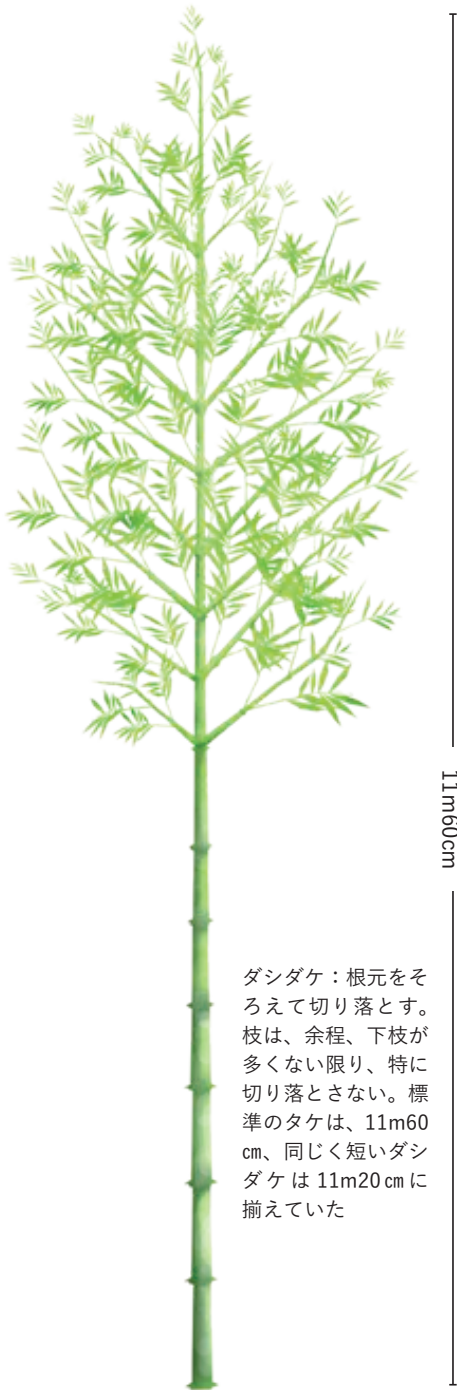
6-8 普段は拝殿の下に保管されていた標準竹。撮影は2013年のものだが、2015年に所在不明になる

る。タカヤマの上の横柱にはハタダケ用の穴があり、そこにはめこんで固定していく。この穴の径を超えないようにハタダケはあまり太くないものを選びわけである。ハタダケは最初にタケの先を切り落とす。地元では、枝を落とすことをハツルという。先をハツったうえで根元を揃えてノコギリで切り落とす。さらに、下枝の三節から四節をナタで切り落としていく。枝の下側にナタで切れ目を入れ、次に枝の上から幹に沿って、ナタの背で叩くと綺麗に切り落とせる。なお、タカヤマに飾るタケの長さは、ヤマの両側で異なる。短いタケを作る際は、根元を二節分ほど切り落としていた。

他方でダシダケは、ヤマの前後に斜めに据えて、飾りつける。各々の場所に、三から四本ほど飾りつける。一定の間隔で角度をつけることで、ヤマ全体では扇のような形の飾りになる。ダシダケは先を切り落とさない。下枝もあまりハツらずに葉は残しておく。先を揃えてから根元を一定の長さに切りそろえるのはハタダケと同じである。ただダシダケは節のすぐ下を切るようにする。ダシダケは、ヤマのうえで斜めに固定するため、根元を踏みつけると割れやすい。それを防ぐために節が一番下になるように切っておく。ダシダケも長短二種を分けて作るが、長さの違いはハタダケと同じにする。

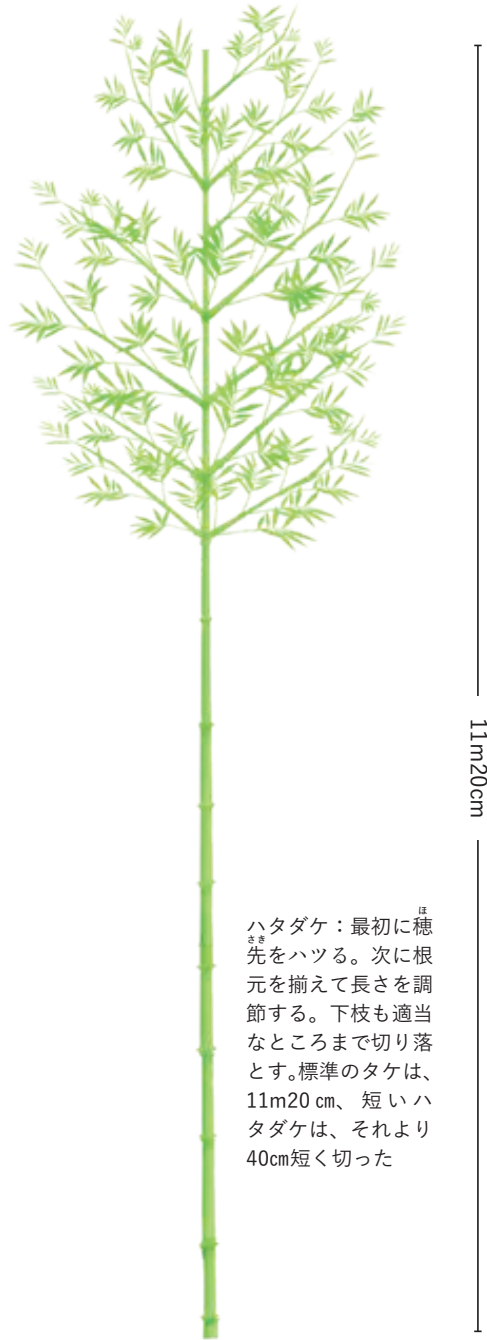
かつての作業では、毎年、子供たちが基準となる長さを決めてから作業を行っていた。人足でも作

■ ハタダケとダシダケのモデル ■



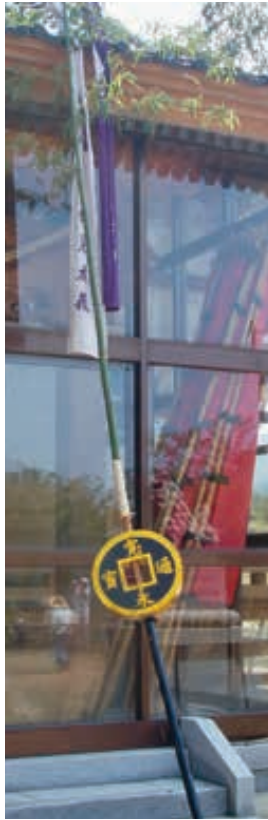
ダシダケ：根元をそろえて切り落とす。枝は、余程、下枝が多くない限り、特に切り落とさない。標準のタケは、11m60cm、同じく短いダシダケは11m20cmに揃えていた

ダシダケ



ハタダケ：最初に穂先をハツる。次に根元を揃えて長さを調節する。下枝も適当なところまで切り落とす。標準のタケは、11m20cm、短いハタダケは、それより40cm短く切った

ハタダケ



6-14 完成したゼニガタ。
拝殿前に置かれている



6-12



6-13

6-12,13 上はタケにゼニガタの棒を突き入れた状態。
下は突き入れた部分をナイゴで補強している



6-11 神社の倉庫に保管されてるゼニガタ

業できるように、標準となるタケを残すようになったのは二〇一〇年のことである（写真98）。この時は、長いダシダケを一一m六〇cm、長いハタダケは一一m二〇cm、各々の短いタケについてはそれらより四〇cm短く切ることに決めた。ただし前述のようにダシダケは節に合わせて切つてあるため、多少長さにはずれはある。もつとも、二〇一五年時にはこの標準竹が所在不明となり、再び、役員たちが経験則で長さを切りそろえるようになっていた。

最後にゼニガタ（銭形）がある。ヤマの進行方向に向かって左側の長い方のハタダケの中心に立てられる。既述したようにゼニガタ用のタケは適度な太さが必要とされる。選別した後、具体的な作業は九日の夜か、近年では一〇日の早朝に行われるようになった。ゼニガタという名称は、直径四二センチほどの寛永通宝をかたどった飾りに由来する（写真99）。飾りは約二メートルの黒塗りの木の棒に貫かれた状態で保管されているが、着脱は可能である。この寛永通宝の模型は、毎年、紫紙と金紙を貼りかえている。

ゼニガタのタケもあらかじめ下枝をハツつておくが、先は切り落とさずにおく。これをゼニガタの棒と組み合わせる。基本的には力技で、細く尖っている棒の先端部をタケの内側に突き刺すのである。挿入部を考慮しながら、タケの下部をゼニガタの木の棒と同じ長さだけ切り落とす。ただし、節がある棒を突き刺せないで、節がなく、棒を突けるほどの太さのある場所で切り落とす。太すぎてゼニガタの棒がうまくはまらず、細すぎるとタケが割れてしまう。ゼニガタの棒を挿入して、少しタケに割れが生じるくらいがちょうどい



6-15 ダシダケの飾りつけ。上から吹き流し、ハタ、吹き流しの順で括っていく



6-16 ハタダケの飾りつけ。ハタダケには文字通り、ハタを3枚括りつける。特に決まりはないが、同じ色のハタは避ける傾向がある

いという。

また、長さの調節は、棒を挿入してから他のハタダケと比べたうえで、先を切って調節する。ただし、一度でうまくいかないこともあり、予備のタケが必要となるのである。

棒を根元まで挿入すると、挿入部のタケの周囲にヌイゴを丁寧巻きつけ、はずれないようにすれば完成である。このゼニガタには、特別の紫と白色のハタが二枚、飾られる。他のハタとは材質も異なり、風格もある。このハタは、他のハタとは別の箱に収められており、現在、使われているものは、二〇年ほど前に寄進されたものである。

□ タケ飾り □

タケを切り終わると、タケ飾りである。まずハタダケには、幹の上部に等間隔で三枚のハタを括りつける。ハタは、幅二五センチ、長さが二メートルほどの布で、赤、黄、青、緑、桃色がある。上部はハタの幅に合わせた木板に挟まれて固定されている。この木板にヒモが通されている。ハタには「奉納」という字が上に、寄進者の名前が下に墨で書かれる。子供の誕生や進学、結婚などに合わせて寄進されることが多い。よってかなりの年代物のハタもあるが、運行を通じて破損したり、汚れたりするものも多い。ある程度古いものは、ヤマを組立てる際のグリス（潤滑油）拭きに使われて使命を終える。ただし、前



6-17 9日の夕方、ほぼタケ飾りが完了した状態。ハタダケとダシダケが、所定の位置に置かれている。拝殿中央前には、作業前のゼニガタ用のタケも置かれている

述したゼニガタのハタや特注で購入したハタは、別扱いで活用されている。

一方でダシダケには、二枚の吹き流しと一枚のハタを括りつける。ダシダケに取りつける吹き流しは、鯉職の上に飾られるものと同じ形状で、五色の布をワイヤー製の円形の輪に縫い合わせて作っている。前述したように少ないながらも、ハタの寄進は続いている。対して、あまり寄進の機会のない吹き流しは、経年による傷みが激しく、括りつけられるものが減少している。

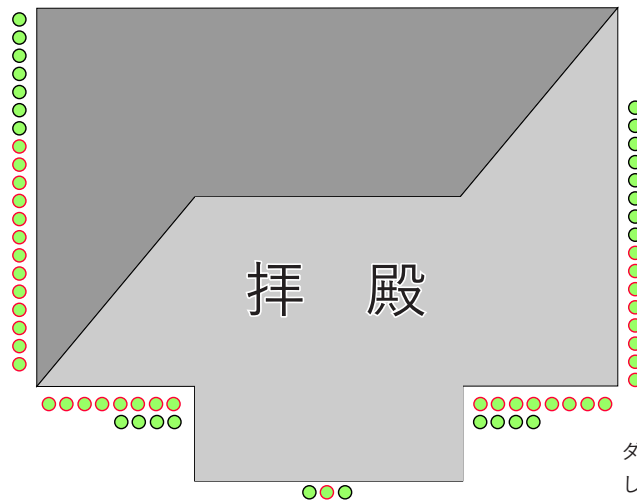
また、ハタダケ、ダシダケともに、予備の分を作る必要がある。ヤマの運行中に折れたタケと交換するためのものである。ハタダケは長いタケが八本、短いタケを一三本飾りつける。近年ではそれに五本から八本ずつ予備を作っておく。ダシダケは、左右各々一〇から一三本ほど用意される。ただし、ハタや吹き流しの数が減っていることから、実際にヤマに飾る分だけ、タケに括りつけておく。

以上のタケは、飾り終わったあとに拝殿に立てかけておくが、その位置もほぼ決まっている。ダシダケは拝殿の前面に、ハタダケは側面におかれる。また、短いタケは拝殿に向かって左側に、長いタケは右側に集められる。これらは、ヤマに飾る際の左右の位置に対応して置かれている。一見すると見分けのつきにくい竹の長短を間違えずに飾るために有効だと考えられる。そして、ゼニガタは一〇日の早朝には、拝殿の正面に置かれることが多い。



6-18 拝殿はいでんの北側に置かれた短いハタダケ

ハタダケ（短）、ハタを飾るタケは13本、予備として5～10本前後を作成、タケが少ないときは、計20本を目処に準備する



ダンダケ（短）、吹き流しとハタを飾るのは7,8本。予備として5本前後を作成

ゼニガタ、1本(予備2本)

ハタダケ（長）、ハタを飾るタケは8本、予備として5～10本前後を作成

ダンダケ（長）、吹き流しとハタを飾るのは7,8本。予備として5本前後を作成

7 申子と松、アテ葉

7-0 箱の中の大小のサルコ

7-1 ヤマに飾るために切り出した松、左の枝部分は神社や御仮屋前の奉納旗ほうのうに用いる

7-3 結びつけられた大型のサルコ

7-2 人足にんそくが松にサルコを結びつける

申子サルコは日吉神社の神の使い、猿をかたどったものである。遠目にはマリかお手玉のようだが、一応、両手両脚かちに頭もついている。布に綿を詰めて作られたものである。その人形の四肢しにあたる部分を糸で一カ所に結わえるため、マリのように丸くなる。サルコは小さなもので数センチから、大きなものでは二〇cmを超えるものまで、様々である。

神社の倉庫では、大小のサルコを木箱に入れて保管している。これらのサルコは、村の女性たちによって作られてきた。かつて子供たちが準備をしていた頃には、傷んだサルコを親に直してもらうとともに新調してもらうこともあった。

松は九日に村の近隣の山からとってくる。林道沿いにはえている不要な若い木を調達することが多い。宵祭りよまつりと本祭りほんまつりで松をかえるため、二本切り出す(写真「c」)。松は枝が五段になっているものを選ぶという老人もいるが、それほど厳密げんみつではないようである。

松は、タカヤマ後部の天守閣てんしゅかくの横に並んで立てられる。天守閣の高さに合わせて二m前後に調整される。次に記すアテ葉あてはとこの松には、多くのサルコが括りつけられる。松自体が大型のため、飾りにもアテ葉では用いない二〇cm前後の大型のサルコを用いる。(写真「b」)。近年では、これらのサルコの飾りつけは、人足の女性たちの仕事になっている。



7-5 アテ葉に数個ずつのサルコを結びつけておく



7-4 アテ葉にヌイゴを括りつける



7-7



7-6

7-6 下写真右：10日の早朝のヤマ飾りで、アテ葉をヤマの側面に飾りつけていく。アテ葉に結ばれたヌイゴをダシオコシのロープに括りつけている

7-7 下写真左：ヤマの側面全体に飾りつけられたアテ葉とサルコ。この年（2013年）は、雨天のため、幕が一時的に外されている。通常は、幕を張り終えてから、アテ葉を飾っていく

アテ葉の作業も九日の午後に行う。タケとともに運んできたアテ葉にヌイゴを括りつける。運行中は外さないので、枝の元に固結びしておく。アテ葉の大きさにもよるが、だいたい四〜五つのサルコを結びつける。サルコにもヌイゴが通してあるが、解けたりしたものは新たに結びなおす。

結び終えたアテ葉は、一カ所にまとめておく。翌日、一〇日早朝のヤマ飾りの際には、ヤマの天守閣の壁をかたどった板を覆うように飾りつける。鉄砲狭間を隠す様子を模した飾りつけである。アテ葉に取りつけたヌイゴの端は、曳山のダシオコシに用いたロープに、葉の裏面が見えるように結びつけて固定する（写真①）。

サルコには様々なサイズがあるが、主に径が五〜一〇cmのものをアテ葉に括りつける。ただし、サルコは全て同じ箱に入っているため、誤って大きなサルコがアテの葉に括りつけられることもある。

なお、これ以外にサルコには小型で三連になっているタイプのものもある。こちらは同じくタカヤマに飾る天守閣の屋根の四隅に飾られる。

8 バンナラシ

バンナラシともいい、漢字で書けば「場馴らし」となるだろう。バンナラシは、八月四日から祭りの前日まで毎日続けられる。午後五時から子供たちが、小太鼓と鉦をもってヤマと同じコースを回る行事である。この行事だけは、現在も「子供」を中心



8-0

8-0,1 タケに括りつけられた小太鼓と鉦。小太鼓は細めのパチで、鉦は木槌で叩くが、かつては木の枝の二又部分を自前で加工して使っていた。祭り当日、小太鼓と鉦は、このままの形でヤマのシタヤマに取りつけられる



8-1

に行われている。かつては、中学三年生までの男子に限られていたが、現在では女子も加わり、時には高校生が先導することもある。子供が数多くいた頃は、鉦と太鼓の周りで笛を吹く子供が加わることもあった。

小太鼓と鉦のリズムは基本的に同じである。ヤアーハ！の掛け声の「ハ」で鉦と小太鼓を同時に叩き、小太鼓中心のリズムとなる。しかし、集落内をぬけ、海沿いの道路の伏見の下と呼ばれる周辺（宵祭りの午前中にヤマが休憩する場所）と、デブラの通りに入り、小さな川を越えた場所（同じく宵祭りの夕方ヤマが休憩する場所、そこから若い衆

のヤツサーが始まる）あたりから、リズムが早くなる。そのままのリズムでデムラの端まで来ると一度休憩になる。さらにデムラから海岸道路を通って本町に戻り、宮本商店から宮の坂へと下る道までの間でも、再び早いリズムで打つ。こちらも本祭りの日に若い衆がヤツサーを行う場所である。坂を登りきり宮に戻ると境内を一周する。これも祭り当日の運行の通りである。境内をぐるりとまわり、恵比寿坂の所まで来ると再び早打ちになる。

この早打ちは、祭り前の一年間に不幸のあった家の前を通過する場合にも行われる。これに限らず、皆月では神事において死は「忌み」と捉えられている。祭りそのものはおろそ、準備においてもそれは同じであった。不幸があつてから一年間は準備を含めて、祭りに関することはなかった。近年では担い手の不足を補う観点から、四十九日を過ぎれば参加することができるとは境となっている。とはいえ四十九日という仏教思想に基づく期間設定については、否定的な者もいる。



8-2 宮の坂を上がってきたバンナラシの子供たち。近年では、一行に女子が加わることも多いが、全体の人数は減少している

9 御仮屋、人足仕事

人足（村の各組ごとに割りふられた働き手）の仕事は八、九日に集中しており、大きく四つに分かれる。

まず、浜や神社の境内、参道の清掃である。この作業は、八日の早朝から始まる。浜では寄ってきたゴミを片づけ、境内では草を刈り、社殿の内外を整える。宮に続く坂道では、曳山の巡行に際して、障害となる木の枝を切り落としておく。

次に境内や村の各所での飾りつけを行う。これらの作業の中心は女性が担う。社殿には祭り用の幕を張り、鳥居の前には奉納旗を設置する。奉納旗は、後に述べる御仮屋の前と日吉神社の銘石がある海岸道路の横にも飾る。また、九日の午後から、タケのハタや吹き流しの括りつけ、アテ葉や松の木にサルコを結わえる作業もこれに含まれる。

三番目に御仮屋の設置である。御仮屋とは文字通り、神輿が宵祭りの夜に一泊する仮設の小屋のことである。御仮屋前には奉納旗や旗キリコ、鳥居が並ぶ。宵祭りの夜には、御幣ギリコが神輿を迎え、若衆が神輿を担いで往復する。祭りがクライマックスを迎える空間である。

四番目にヤマのネジンカキやダシオコシである。いずれも組立てたヤマの接続部を固定するための作業である。御仮屋の作業を八日ですませ、こちらの作業を九日に行うことが多い。その具体的な作業は、七四ページ以下にゆずる。以下では御仮屋の作業を中心に紹介することにした。



9-0 奉納旗が風に揺れる御仮屋前。すでに旗持の旗もおかれている



9-1 宮の倉庫から運びだし、集会所の駐車場に仮置きされた御飯屋の部材



9-2 御飯屋の骨組みを組立てる様子。棟木をクレーン車で吊りさげている



9-3

御飯屋の部材も宮の倉庫に保管されている。清掃が終わると人足の男性陣は、部材をトラックで集会所の駐車場に運びだす（写真9-1）。御飯屋は、ちょうど集会所の前の路上に立てるため都合がよい。かつては本町の砂浜の上に建てられていた。環境は大きく変わったが、位置的には現在もほぼ変わらないという。実際、集落内から海に向かって伸びる道路のうち、御飯屋小路と呼ばれる小路からは、現在でも御飯屋の姿が見通せる。また、御飯屋の正面をテムラの神明社と向かいあうように立てる。山王権現が男の神様で、神明社が女の神様なので、

七夕の故事になぞったものと説明してくれる話者もいた。近年では、八日の午後に御飯屋を立てることが多いが、年によっては九日の午前中に済ませることもある。御飯屋も基本は木の部材を組み合わせて立てる。各々の部材は、「海縦三」や「山横二」というふうになぞるべき場所が記されている。御飯屋だけでなく、祭りでは右、左といった向かい合った者同士で逆になる指標は使わない。必ず海側、山側、ないしはニシデ側、本町側といった地理的な指標を作業中も用いる。部材に記された名称に沿って所定

の場所に配置していき、下部から縦柱と横柱を組み合わせていく。部材の一部には金具で固定する場所もあるが、多くの部位は柱同士を接合し、ワラ縄で固定する。もともと、写真②でもわかるように御仮屋の部材のなかには、かなり大きいものがある。とりわけ、屋根の梁などは人が抱えてこの高さに運びこむのはむづかしい。そのため、現在の組立てでは、地元建設会社から借りたクレーン車を使って、部材を持ちあげる。脚立なども駆使して、御仮屋を組立てるが、高齢化の進む毎月では今後の課題となる作業である。



9-5



9-4

9-4,5 クレーン車でシートを吊りあげ、屋根に設置する。正面の留め金に固定すれば、巴の印も正面にくる



9-6 胴幕をかけ終わると面幕も飾る。写真に見える色鮮やかな紺色の面は内側で、色あせしていない

御仮屋の部材を組立て終わると、屋根には防水加工した白いビニールシートをかぶせる。この時も、写真③のようにクレーン車が活躍する。正面以外の三方には、屋根と同じ白い色の胴幕を張り巡らし、正面には紺色の面幕を飾る。また、御仮屋の作業と並行して、御仮屋前の奉納旗の飾りつけの準備も行われる。ちなみに、御仮屋の手前にある柵のような丈の低い部材は、横柱に穴が空いている。神輿の行列に随行する旗持ちがもつ四神の祭り旗と紅色の祭り旗を、神輿の一行が到着するとここに挿して飾ることになる。よってここにハタがある



9-7



9-8 御飯屋前の奉納旗などの準備。手前に海側の支柱が立ち、山側の柱の準備を行なっている。奉納旗は御飯屋に近い2組が高く、そのあとの2組が短い。まず、御飯屋に近い旗から位置を定めて立てていくと、オシミも張りやすい

9-9 御飯屋前に立ち並んだ支柱。海側（手前）と山側がそれぞれ4本ずつ並んでいるが、一番奥の支柱は、旗キリコの支柱である。旗自体は柱の基部に滑車とタガをつけた状態でたたまれている。支柱の先にもそれぞれ松が飾られている。これらの旗が風にたなびくのは、10日の朝である



9-10 宮の前の奉納旗を飾りつける。こちらの作業は9日の午後、社殿の飾りつけと同じ時に行われている。写真からもわかるように、こちらの支柱は作り置きのもので、重石などを運んでくる必要はない

のを目にするのは、実質的には本祭りの日だけである。
御飯屋の前には高さの異なる三対の奉納旗が飾られる、重石を新橋のたもとから転がし、支柱を集会所の裏から運んでくる。支柱にもそれぞれ場所と用途が記されており、旗ごとの柱が決まっている。支柱の先に松を飾り、旗をあげる滑車を取りつける。また、三方から支柱を張るためのオシミも取りつける。支柱の根元を重石に入れると慎重に重石をおこしながら支柱を立てる。オシミを各々の場所で固定するとともに、滑車からのロープを旗に結べば準備が完了する。奉納旗の準備が整うと、御飯屋前の空には、複雑な幾何学模様を描かれることになる（写真9-6）。

なお、神社の鳥居前の奉納旗と海岸道路の前の奉納旗は、前日の祭りの準備から飾られている（写真9-10）。

10 ヤマ 曳山タテ

かつて曳山タテは、中学三年生の大将を中心とする子供達にとって、準備期間中最大のイベントだった。高校生が手伝うこともあったが、基本的に未成年たちに作業が任されていたことは、現在では驚きと言わざるをえない。

ヤマの組立ても、宮の倉庫から部材運び出すところから始まる。部材は倉庫内の御飯屋の部材の向かい側にまとめて保管されている。それらを拝殿横の草地に置いていく。部材の配置は、ヤマタテの作業に合わせて、都合のよい場所を選ぶ。中心的な場所には四本の車輪をおき、その近くには車軸や土台となる部分の部材を置く。部材は車輪や車軸を合わせると五〇近くになる。これ以外にも、タカヤマとシタヤマの床となる木板とベニア板の部材がある。また、それぞれの部材には、前右、中左といった所定の位置を示す文字が彫られたり、墨で書きこまれたりしている。これらの文字にしたがって、ヤマの前後左右に部材を仮置きする。ちなみに縦柱はヤマを正面から見るときにこの書きこみの文字が見える方向に配置しなければならない。車輪と車軸はケヤキの木、それ以外はアテの木で作られている。

作業では、まず四つの車輪を据え、その車軸に潤滑油となるグリスを塗る。グリスを塗る際には、使えなくなったハタの布が、雑巾代わりに使われることが多かった。しかし近年では、ハタ自体が不足しているため、ゴム手袋を用意する青年会員もいる。グリスを塗り終わるとヤマの組立が始まる。まず車輪に車軸を挿入する。車輪が大きいので、何人かが車輪を立てた状態に保ち、車軸を少し浮かせるようにして挿入する。バランスが難しいが、車軸にもグリスが付いているた



10-0 車軸を担ぎあげる



10-2 車軸を車輪にはめる作業

10-1 車輪の内側にグリス（潤滑油）を塗りこむ
じゆんかつ油

10-4 前後の車軸に横柱をつなぐ。土台となるこの部分は、抜けないように木釘を打ちこんで固定する



10-3 ワラ縄で車軸部を持ち上げ、適当なところで、車輪を押し入れる



10-6 仮置きされた縦柱。この前後左右に横柱を同時に入れなければならない。この年は、最初の段取りが悪く、横柱を探している



10-5 車輪の外側にも横柱をすえ、木釘で固定する



10-7 左手が左右の2本の横柱、右奥が3本の横柱を差しこんでいるところ、全体を差しこんでから縦柱を固定する



10-8 縦柱の上にも横柱をすえる



10-9 さらに前後の横柱もすえてから、左右の縦柱を加える。こちらは長い方の縦柱



10-10 この柱の上に石垣を表わした板をおく

め直接手で触れることができない。そこで年によっては、車軸の部分に
フラ縄で持ちあげて挿入することもある(写真10-6)。

次にこの前後の車軸をつなぐ柱を差しこむ(写真10-7)。車輪の外側
にも各々、横柱を接続する。柱には木釘をかませて固定を強化する(写
真10-8)。こうしてヤマの土台が完成する。

さらに縦柱を入れるのだが、そのままはめこんではいけない。この縦
柱には前後に二本、左右に三本の横柱(うち一本は柱というよりは板)
を挟まないといけない。完全に固定してしまつては、これらの柱が入ら
ないのである。人数を集めて前後左右の横柱を抱え、縦柱に組みこんで
から、縦柱を土台の穴にはめこむ(写真10-9)。この過程が無事に終わ

るとタカヤマの部分の組立てに入る。縦柱をヤマの左右に加えるが、
これらは左右で長さが異なる。短い柱の面は、ヤマの出入り口として
使用される場所になる。もう一方の長い柱の面には、石垣の板をすえ、
その上にも横柱を重ねる(写真10-9,10)。

中央部にも横柱を据えつつ、ヤマの両側に斜めの柱を挿入するとほ
ぼ舟形のヤマの形がイメージできるくらいに仕上がってくる。またヤ
マの中央部には、石垣の上と同じ高さの横柱を据える。最終的には各々
の床面にベニヤ板をはめこむことになる。こうしてタカヤマの半分は
二層式になり、石垣の板の高さの分(約30cm)、空間ができる。こ
のスペースにはオリナワやナットウ、場合によっては、余った提灯な



10-12 石垣の上に柱を据え、同じ高さの中柱も設置する



10-11 出入口側の柱や中央の横柱も据えていく



10-14 斜めの柱を調整する



10-13 前後に斜めの柱を挿入して固定する。全体的なゆがみなどではまりにくい場合には、巨大な木槌などを用いる



10-15 斜めの柱の先に横柱をはめこむ。不安定な足場のため、力が入りにくい

どの道具類をつみこむ場所になる。
 タカヤマの細かな部材を取りつけつつ、前後の
 三本の斜めの柱の先に横柱を据えて固定すれば
 とりあえずの完成である（写真10-14、15）。なお、
 シタヤマの床板とタカヤマの床部分のベニア板の
 パーツはこの時点では配置しない。ネジンカキの
 際に再び取り外して作業しなければならぬから
 である。

かつては、試行錯誤を繰り返して何時間も費や
 したヤマタテだが、青年会が受け持つようになって
 からは四十分から四十五分ほどで完成する。む
 しろ近年の青年会員たちの課題は、次に見るネジ
 ンカキの手順を把握することにあるようである。

10-17 最後に石垣側の縦柱2本と横柱に、ボルトを通して固定する。本来、ヤマには金物を使わなかったのだが、経年の劣化によって、接合部が緩んできたため、10年ほど前にこのような措置をとった。外側からボルトを差しこみ、内側でナットを締める



10-16 組立てがほぼ完成し、長めのボルトを差しこむ位置を確認しているところ



10-18 ヤマタテが完了した状態、この年は、シタヤマの床板もはめこんでいる

11 ネジンカキとダシオコシ

人足が担っていた重要な作業として、ネジンカキとダシオコシがある。いずれも曳山の接続部を太いロープを用いて固定する作業である。現在は地区の有志と青年会も参加して一連の作業にあたっている。まず、ネジンカキは、ヤマの各部に端を輪に結んだ太いロープを括りつける。このロープの輪を幾重にも巻くことで、ヤマの接続部を締めあげて固定する。

ネジンカキのロープは、(1)タカヤマと車軸ごとに計四カ所、(2)ヤマの前と後で、斜めにクロスするように二カ所ずつ、また、(3)シタヤマの床の下でヤマの四方の柱をクロスさせて二カ所、シタヤマ天井部も同様に二カ所を括りつける。よってネジンカキでは、計一二本のロープが必要となる。また、ねじったロープを固定するためのネジン棒と呼ばれる木の棒も同じだけ必要になる。ネジンカキはこれらのロープにワラ縄を巻きつける準備から始まる。ワラ縄を巻くのは一本のロープにつき二カ所ずつである。ヤマの部材に直接接触する部分か車軸に通す際にグリスがつく部分にあたる。

ロープの準備ができると車軸とタカヤマとのネジンカキから始める。ロープはギリギリの長さに調整されているため、一人の力では、車軸に通すことができない。そこで宮にあるネジンカキ用の道具を用いる。太くて丸い木の棒に雨どいに用いるような金属板をはめこんだ作りである。木からとび出た部分は、下部の一部を残して削り取っており、巨大なフォークカスプーンのような形状である。おそらく、作業のために臨機応変に作り出されたものだろう。

この道具にロープの一方を通しておき、車軸の下部に金属板の飛び



11-0 ネジンカキの作業の様子



11-1 ネジンカキのロープにワラ縄を巻く作業。巻く場所は経験的なもので、人によって意見が異なることもある



11-2 倉庫に保管されているネジン棒。ケヤキの枝を使うとされるが、右端の2本はサクラの枝によるものである。凹みを入れた部分にロープをかませてねじっていく



11-3 シタヤマにかけたネジンのようす。ロープが幾重にもねじられ、そのロープにネジン棒が固定されている

出た部分を重ね合わせる。ロープを巨大な木槌などで押し出して車軸にはめこむ。全体の位置を調整したうえで、ロープの中心にネジン棒をかませて何重にも回していく。そして、これ以上回らないほどにロープを締めつけたうえで、ネジン棒が戻らないようにヤマの縦柱にワラ縄で強く固定する（写真11-7,8）。

四本の車軸が終わるとヤマの前後のネジンカキに移る。こちらも、ヤマの上部と斜め下の車軸にロープを通すので、途中までの作業は同じである。車軸とヤマの柱に通したロープの中心を巻き締めていき、最後にヤマの横柱の中心にワラ縄で固定している。一本のロープにつき、ネジン棒は一本なので、写真11-2,3のように左右対称のような姿

で固定されることになる。

三番目の作業でも交差させた場所から適当な距離のところまでネジン棒をかませて巻き締める。ただ、このネジン棒は、各々の床面に接するため、固定する柱がない。そこで、しっかりとねじったあとで、ネジンの片側にワラ縄をかませ、クロスしているもう一方のロープに結びつけて固定することになる。この作業を行うために、ネジンカキは、二本のロープを同時並行して回していく必要がある（写真11-3）。

その他に、天守閣についても天守の一番上のパーツから、ヤマの下の柱にネジンを通し、固定する作業もある（後述）。ネジンをカク作業はいずれも力仕事であり、同時に危険がともなう。

□ 車軸のネジンカキ □



11-5 短めに縛ったロープを道具を使って車軸に通し、ネジンをカいていく 左側では前後のネジンを車軸に通している



11-4 車軸とタカヤマに巻いた状態での長さをはかる



11-7 ネジン棒をワラ縄で縦柱に縛りつけ固定する



11-6 ネジン棒に別のロープをつなぎ、ギリギリまで回す



11-9 車軸とタカヤマのネジンをカいた状態



11-8 縦柱に固定されたネジン棒

□ 前後のネジンカキ □



11-11 柱と柱の間に棒をまわして、ネジンをカクが、徐々に回しにくくなる



11-10 ロープにネジン棒を入れてねじっている。前後のネジンは、必ず車軸のネジンの上にかぶせる



11-12 2本目のネジンをカキ終わり、ネジン棒を固定する。前後のネジンカキでは、ネジン棒を横柱にワラ縄で固定する



11-14 横柱に固定されたネジン棒



11-13 前後のネジンをカイタ状態。特徴的な×印が現れる

□ 天守閣のネジンカキ □



11-16 天守閣の一面は板に隠れるため、屋根がついていない。ここには、1978（昭和53）年をはじめ、修繕した年の銘が記されている



11-15 最初に天守閣用の板をタカヤマに据え、その上に天守閣のパーツを設置する



11-18 天守閣につなげたロープもネジンをかけるか、ターンバックルを使って固定する



11-17 3段目を据えて内側からロープを通す

天守閣をかたどっているの、上の屋根には鯨鉾を据える構造になっている。二つの鯨鉾を屋根に差しこみ、留金を通して天守に固定する。さらに天守の屋根の四方にもサルコを飾る。このサルコは、三つのサルコを糸でつなげた独特の形をしている。天守閣は三層なので計一二個必要となる。準備の時によく足りない騒ぎになるのが、この場所に飾るサルコである。

天守閣はタカヤマの後方に設置する。大中小の三層のパーツに分かれており、一番下の層には城の石垣部分が付加されている（写真11-15）。これら三つのパーツを積み木のように上に乗せていくと、全体では二メートルを超える高さになる。

一番上のパーツの側面を貫く穴が二カ所あけられており、そこに両端を白く着色したネジン棒を通す。そのネジン棒にロープを通し、シタヤマの下部で結ぶ（写真11-16）。そのロープにネジン棒を入れることで、天守閣の上のパーツが下の各パーツを抑えつける。この力で天守閣全体がはずれない仕組みになっている。ちなみに近年では、このロープを固定する際にも、ターンバックル（写真11-18）が用いられている。

□
ダシダケ
□



11-20 柱にダシダケを括る。タケ一筋ごとにワラ縄を柱に巻く根気のいる作業である



11-19 ダシダケを編む。3人同時に作業を進めなければならない



11-21 ダシダケを括ったうえで、継ぎ足しに必要なタケの本数を確認する



11-23



11-22

11-22 編んだダシダケを取りつけた状態。このままでは、柱の下に隙間があり、危険である
11-23 タケを継ぎ足して編みなおす。隙間を埋めるとともに、中柱に合わせてタケの一部を割って、平たくしてある

マーなどで叩いて平らにしておく。
柱の上にかさばったタケは危険なので、ハンマーなど

ダシダケとは、二つの用途のタケの呼称として使われることがある。一つは、吹き流しとハタを結びつけ、タカヤマの上に立てるタケのことである。他方で、同じタカヤマの斜め部分の床面に設置するタケのこともダシダケと呼ぶ。

床面となるダシダケには、ハタダケの余りを用いていた。ハタダケの寸法を合わせるために切った残りの幹を使うこともある。それらのタケをタカヤマの幅を少し超える程度に切りそろえていく。それを短冊状に並べたうえで、中央と左右の計三カ所にワラ縄を用いて結びつける。ワラ縄を二本用意し、互い違いに巻きながらタケを固定していく(写真11-19)。

ある程度タケを結び終わると一旦、ヤマの上に配置する。タカヤマの中柱があるため、その部分を避けてタケを継ぎ足す必要があるからである(写真11-22,23)。また、

□
ダシオコシ
□

11-25



11-24

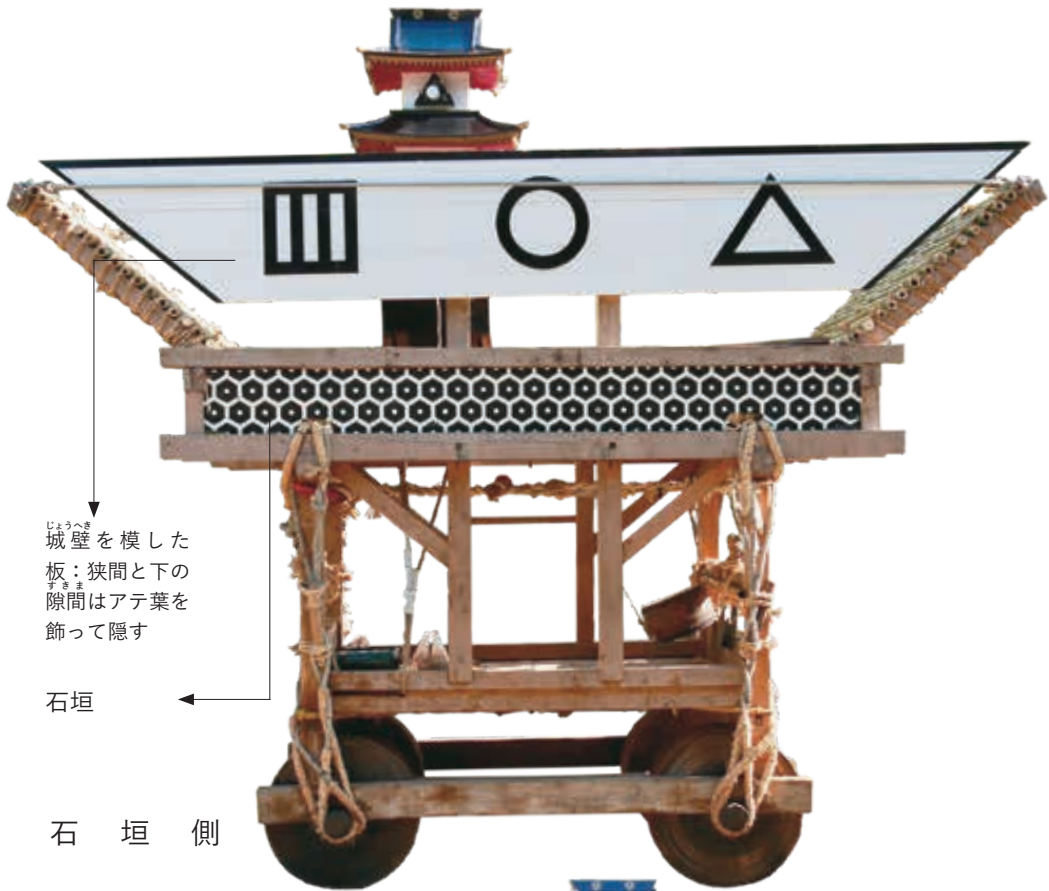


11-26

11-24,25 出入口側のタカヤマにターンバックルを取りつけたロープを固定し、締めていく
11-26 石垣側でもロープのダシオコシを行う、ロープの締め具合を確認している

ダシオコシは、タカヤマの固定を目的としている。タカヤマの前後にロープをかけて引き締め、タカヤマの斜めの柱を反らせるようにして固定する。横柱に接している斜めの柱が反り返ることで、隙間が生じる。その隙間に拳が入るか入らない程度まで柱が反ればよい。

現在のやり方は、二〇〇六、七年くらいから採用されたものである。まず、ターンバックルを取りつけたロープを二本、用意する。このロープの先は輪になっており、タカヤマの柱の凸部に通せるようになっていいる。この輪をタカヤマの前後の横柱の先に取りつけ、ターンバックルを巻いてロープを締めていく(写真11-24,25)。斜めの柱が反り返ってタカヤマの幅が短くなる。この斜めに取りつけた柱が、横柱から五センチほど浮きあがれば、十分とされる。ヤマの両側がずれていれば、ヤマにゆがみが生じるため、左右の引き締める量を調節しながら巻いていく。巻きあがったターンバックル部分は、白いテープを巻いて、緩みを防止するとともに、突起部分による怪我の予防とする。

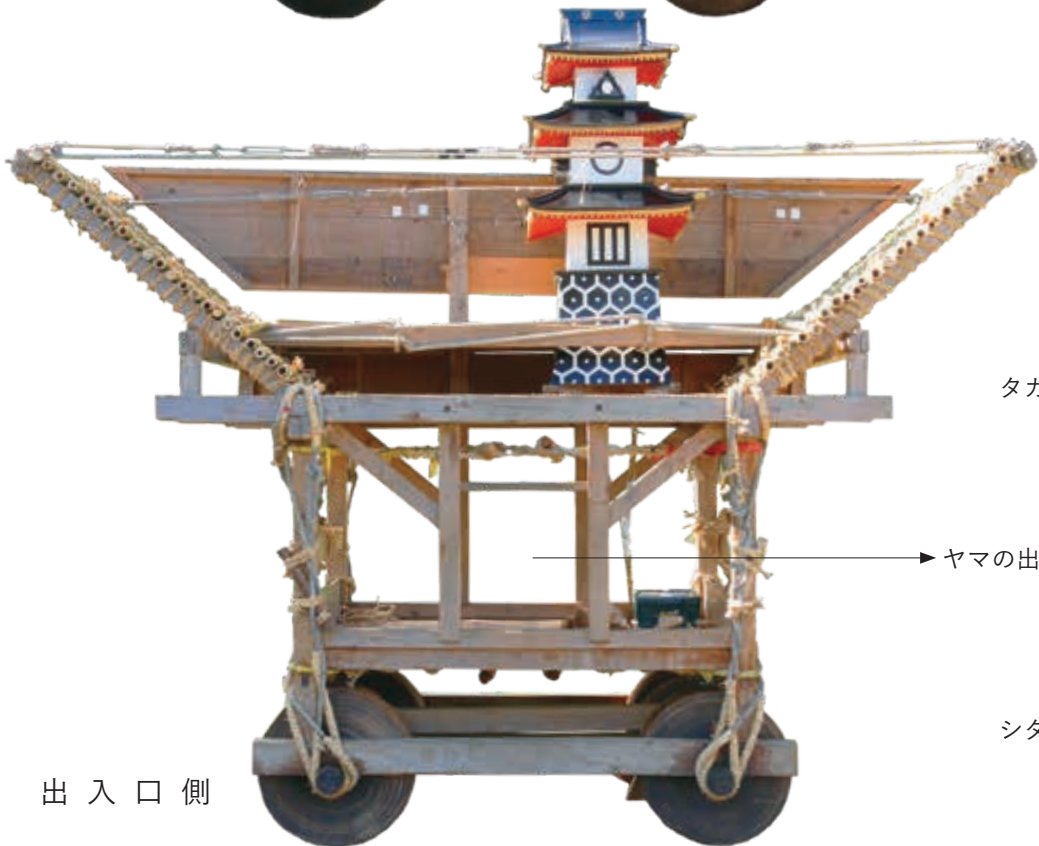


じょうへき
城壁を模した
板：狭間と下の
隙間はアテ葉を
飾って隠す

石垣

石垣側

■ ネジンカキ・ダシオコシ作業完成図 ■



タカヤマ

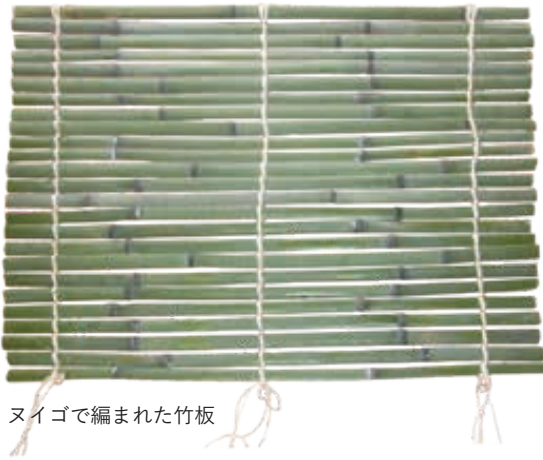
▶ ヤマの出入口

シタヤマ

出入口側



11-28,29 金具の凸部をタケの中心にあて、そのままタケを地面に叩きつけると勢いで6面に割れる。節の部分などの微調整はのちほど行う



11-30 スイゴで編まれた竹板



11-32 巻きつけられたタケ



11-31 オシミ用の柱

□ タケ割り □



11-27 タケを割る鉄製の道具

ヤマの運行の際、オシミ（ヤマの下り坂での速度調整やバランスを保つ綱）を巻きつけるコンクリート製の柱（一本は木製で取り外しができる）には、竹板を巻いて綱の送りをスムーズにする。ヤマ飾り（かき）で余ったタケを、道具（写真11-27）を使って六片に割り、スイゴで編む。柱は全部で七本あるが、近年、オシミの綱が長くなっていることもあり、一度のみ、あるいは全く使わない柱もあるため、柱の数だけ竹板を用意しているわけではない。年によっては前年に作った竹板を、使い回しすることもある。

12 ヤマ 曳山飾り

八月一〇日の運行時刻表には、「曳山飾り 午前五時半」と書いてある（写真5-16）。しかし、五時半には、すでに何人かの若い衆が作業を始めている。早朝から集うメンバーの多くは、毎年、ほぼ決まっている。青年会の役員とそのOBたちである。作業中のヤマを見上げる年配者の姿もちらほらとみられる。

ヤマ飾りは大きく四つに分かれる。まず、ヤマの各所に幕を飾る作業である。次ページにあるようにシタヤマを飾る胴幕、タカヤマの周囲を飾る面幕と横の幕、さらにヤマの前後を飾る四枚ずつの桐幕がある。胴幕から面幕、キリ幕と順に飾っていく。二番目にヒヨコダシの取りつけとアテ葉を括りつける作業がある。ヒヨコダシは、ヤマの前後の正面とその両横の斜めになった部分に固定する。三番目にタカヤマにタケを括りつける作業がある。最初に出入り口側の中央に銭形を立て、そこから順にハタダケを立てる。続いてダシダケを斜めに角度をもたせて立てていく。最後に松や御幣の飾りつけと小太鼓の取りつけ、オリナワなどの運びこみの作業である。

これらの作業の多くは並行して行われる。ただしこの手順を踏まなければできない作業もある。最初に面幕を飾ってからでないとヒヨコダシは取りつけられない。アテの葉を括り終えていないとタケをあげることも難しい。また、松の木はタカヤマでの作業の邪魔になるため、最後に運びこんで固定する。

以下では、まず幕とヒヨコダシを紹介したうえで、各作業の様子について紹介することにした。



12-0 早朝から始められるヤマ飾りの様子

■ ヤマの幕とヒヨコダシ ■



648cm



60.5cm

Kiriko 幕 1: 白



62cm

Kiriko 幕 2: 緑



61cm

Kiriko 幕 3: 黒



60.5cm

Kiriko 幕 4: 紺

208 ~ 211cm

キリ桐幕は、上から白、緑、黒、紺の順で取りつける。この順番をウロ覚えの青年会員も多く、飾りつけで迷うこともある。そのため、乳の部分に幕の順番が記されているが、そのことにも気づいていない会員もいる



137cm

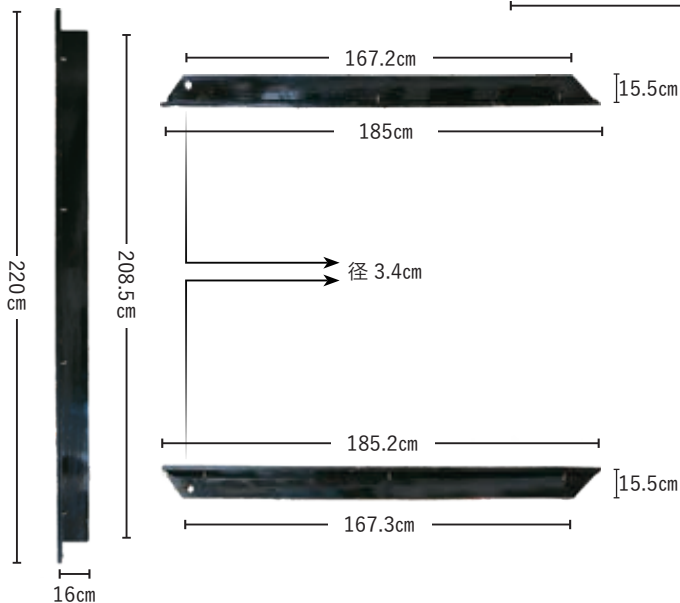
1017cm

面幕 面幕は、タカヤマの斜面の3方をまくことになる。正面に2つの巴トモエが並ぶように固定する。また、面幕とキリ幕は、ヤマの前後に各々、飾るため、2組用いる。なお、面幕とキリ幕の名称には、世代間でもズレが生じている



ヒヨコダシ

ヒヨコダシは、黒塗りでタカヤマの正面と両横に取りつける。こちらも前後で二組用いる。両横のヒヨコダシには上部に穴が空いており、ヤマの柱には、取りつけるための凸部がある。それ以外の場所には、ヒヨコダシに小さな穴が空いており、そこにロープを通してタカヤマの柱に括りつける



面幕(横)

面幕の繫ぎ目つなぎめ = ヤマ側面部 (出入口とその反対側) の上部に飾り、前後の面幕をつなぐ。こちらも左右で2枚ある



胴幕

ヤマの後ろから、寄贈の年月日きそうが記された場所を起点として、シタヤマの周囲をぐるりと時計回りに1めぐりする。各々の面ごとに巴の印が2つ並ぶように飾り、出入口とその対面の中央部には房を結んで、幕を持ち上げる



作業はシタヤマの胴幕からはじまる。胴幕はヤマを飾るもっとも大きな幕である。正面の巴ともえの位置を決め、一回りして裏面が重なるように巻いていく(写真12-1)。出入口とその対面にはフサをつけて幕を飾る。次にタカヤマの上の部分を飾る赤い面幕が据えられる(写真12-2,3)。この幕は、正面と左右の斜めの部分が一組になっている。そのため、ヤマに取りつける前に各々の乳ちちに幕タケを通しておく。通したタケの端はし同士を九〇度に組んでから、交差したタケをヌイゴで固定する。こうしてコの字型の幕ができるとタカヤマにあげ、ヤマの柱の各部にヌイゴで結びつける。

赤い面幕の下には、長方形の桐幕かりが四段にわたって飾られる。上から順に白、緑、黒、紺こんの順番である。これらのキリ幕は、幕の乳の部分(写真12-5,6)をヌイゴで結んでタケと固定し、もう一方をダシダ



12-1 胴幕を巻いたところ



12-2 面幕に3本分のタケを挿し、端をヌイゴでしぼる



12-3 面幕を飾る。ヤマに設置後に余分なタケは切り落とす



12-4 ヒヨコダシ(横)を取りつける

ケに通して適当な長さに結びつける。各々のキリ幕に結んだヌイゴはほぼ等間隔とうかんかくでダシダケに結わえていく。ここでキリ幕が並行で、等間隔に吊つるさされているかどうかを確かめる者が必要になる。ヤマの前に待機して、「ニシデ側、もう少し下げて」や、「あと二センチほどマチ側に」といった指示を出す。

タカヤマにいる者は、指示に合わせて結ぶ高さを変えたり、左右にずらしたりする。場合によって、結ぶ位置を前後に変えることもある。白から順に仮止めして、四枚の幕が揃そろった段階で、全体のバランスを見直して修正する。左右にズレがなく、幕同士が平行になるようにする。また、幕に記された巴ともえが、半分くらい隠れる間隔かんかくに調節する。全体のバランスが確認されると、ヌイゴをタケに固定していく。

キリ幕と並行して黒塗りのヒヨコダシが、タカヤマの三面(前後



12-6 ヤマの前のきり幕、2 番目の幕を仮止めしている



12-5 ヤマの後のきり幕、これは3 番目の黒い幕



12-7 石垣側にアテ葉を飾る。台形の白い板と石垣の隙間で隠れるように調節する

で計六面)に取りつけられる(写真12-4)。ヒヨコダシのうち、両横のものには三カ所、正面に取りつけるものには四カ所、穴が空いている。あらかじめこの穴には、径一センチほどのロープが通される。そのロープでヤマとヒヨコダシを結びつけて固定する。また両横のヒヨコダシの一方には、やや大きな穴が空いており、ヤマの凸部に差しこむ。二〇〇〇年代の半ばまでは、このロープの代わりに、ヌイゴを三つ編みして作った太めのミツナワを利用していた。

ヤマの片側は城の城壁を模した台形の白い板が据えられている。この板の上を覆うようにアテ葉が括りつけられる(写真12-7)。主要な枝にヌイゴをくくりつけ、もう一方をヤマのダシオコシのロープに結び合わせる。板とヤマとの隙間がアテ葉で隠れるくらいの長さにもヌイゴを調節している。

アテ葉には、祭りの前日にサルコを飾りつけている。人によっては、一つのアテ葉につき、七つずつ括ると言う者もいるが、必ずしも一定してはいない。葉の茂り具合に合わせてバランスよく飾るようになっている。

タケ飾りは、ハタダケからはじめる。タカヤマの両横の柱には、深さ3cmほどの穴が等間隔であけられており、そこにタケを差しこむ。その前に、ダシオコシの二本のロープの間を通しておき、ロープとタケをヌイゴで結びつけて固定する。ハタダケを立てる時には、必ずゼニガタを最初に立てる。そして、ゼニガタの周囲から順に立てていく。これは、ヤマの巡行の間、ハタダケを立て直す際も必ず守られる。逆にタケを倒す時には、最後にゼニガタを倒すことが決まっている。短いタケも、真ん中のタケから順に両端のタケを立てていく。

ハタダケを立てる作業に続いて、吹き流しをつけたダシダケを立てる。立てるといっても、既に述べたようにダシダケはヤマの前後に傾けて設置する。最初の一本は、タカヤマの傾斜とほとんど並行するぐらいの角度に固定する。ダシダケも固定は二カ所で



12-8 ゼニガタを立てる準備



12-9 ロープとハタダケをヌイゴで縛る



12-10 天守閣シヤチホコの鯨銚を飾る



12-11 ハタダケが立ちだす作業は加速する。石垣側にもタケが運ばれ、ダシダケも運びこまれる



12-14 松をタカヤマにあげ、天守閣や柱など、3方からワラ縄でとめて固定する



12-12 ダシダケの最初の1本をハタダケに固定する



12-13 後ろヤマのダシダケ、この年は後ろも4本のタケを飾った



12-15 神職が準備した御幣箱も後ろヤマからあげて松の横に飾る

行う。まず、ハタダケと同じようにダシオコシのロープの間に差しこむ。タケの傾き加減を調節しながらヌイゴで固定する。他方でタケの根元付近はワラナワで固定する。ダシダケは、ハタダケのように差しこむ穴がない。端のハタダケの根元にワラ縄で幾重にも巻いて結び合わせる。二本目のダシダケは、少し角度をあげて固定する。根元では、最初のダシダケの根元にワラ縄を巻きつけて固定する。ただし人によっては、もう一本手前のハタダケにダシダケの根元をあわせ、固定する者もいる。三本目、四本目も同じ要領で角度を調整して固定していくと、ヤマ全体ではタケに飾ったハタや吹き流しが、ちょうど扇を開いたように弧を描いて広がって見える。



奉
内

奉
内

奉
内

奉
内

瑞
惠





12-16 10日、午前7時半を過ぎて



12-17 オリナワを一まとめにして運びこむ



12-18 小太鼓と鉦もシタヤマの前方に据える



12-19 逆様にして乾かしているお神酒樽



12-20 水に浸けてある新しいテブリ

以上の作業が終わると松の木と御幣箱ごへいばこをヤマの後ろから運びこみ、それぞれワラ縄で固定する。御幣箱とは、御幣をのせた方形の箱に文字を入れ、タケをさしたもので、こちらも全体の高さは二メートルをこえる。松の木は、ヤマの柱と天守閣てんしゅかくの基部に結びつけ、御幣箱は柱に結びつける。忘れてならないのが天守閣の鯨銚しゅじょうである。天守閣の屋根にはめこみ、差しこみ式の留め具で固定する。こうして、大方の作業が終わった。そこに姿を現わしたヤマは、幾日もの作業と、幾つもの工程を経て、幾人もの人たちの絆きずなによって組立てられている。

小太鼓と鉦かねもこの時に据えつける。オリナワやナツトウ、ヌイゴなど必要なモノの運びこみが終われば、あとは祭りの始まりを待つばかりとなる。

祭りの始まりを待つばかりと書いたが、この段階では飾りつけとしては未完成である。タカヤマに二体の人形を据えおいてヤマの飾りは完成となる。ただしこの完成形は、一〇日の昼休みからの一時期と、

翌二日のヤマ飾り後の一時期だけに見られる。二体の人形飾りは、ヤマの運行にも関わっていることから、続編にて触れることにする。

□ その他の準備 □

祭りでは個別の担当や裏方に関わる準備がいくつもある。立場が違ふと気づかないことが多いが、祭りに向けて備えられたモノたちは、直前になると村のそここに垣間見える。写真12-16は集会所で逆さで乾かされたお神酒みきの樽たるである。御神酒が実際に出されるのは、ヤマが村に降りてからなので、祭り直前までこちらに置いてあった。役員たちの仕事である。

次の写真12-20は、本町とニシデの境の溝端みぞはたに浸ひたされている新調のテブリである。テブリはヤマを操作するもつとも重要な役目をもつ。水を馴染なじませることで、使いやすくなるようである。これらの準備は、



12-21 準備が整い、神社の倉庫に置かれている大太鼓

テプリの使い手たち自身によるものである。さらに写真12-21は準備が整えられた大太鼓の様子である。かつて大太鼓には担ぎ手がいたが、現在は、この台車にのせて神輿の行列に随行する。打ち手の多くも女性が担当するようになった。担ぎ手がいた頃の名残として、太鼓には太い担ぎ棒が据えられている。また、数本のハタを巻いたタケが継ぎ合わされた部分は、宵祭りの夜、提灯をかざり飾る役目を果たす。こちらは山王権現太鼓保存会によって、九日の間に準備されている。

皆月のもう一つの社、神明社（豊受神社）では、デムラの人足が宮の周囲の掃除を行っている。さらに祭りの前日には、日吉神社と同じく宮の周囲に祭りのための飾りつけを行うことになる。

村の北のはずれの神様岩には注連縄が張られ、お神酒、米、塩が供えられていた。かつてこの岩は海岸近くにあった。そこに神様が漂着し、後に山王権現と化したとされる伝説の岩である。宵祭りの日、神輿の一行は、この神様岩に参り、神事を執りおこなう。山王祭の由緒ともいえる場所を守るのには、神様が流れ着いた後、小さな童となって家に仕えたとされるキヘイ（政木家）である。



12-22 ニシデの端にある神様岩の様子

掲載写真一覧（年月日、撮影者、ページ）

0-0	2018、寺二奉代	2,3	3-13	2012、川村清志	31	6-13	2012、川村清志	58	11-13	2012、川村清志	77
0-1	(地図)	6	3-14	2012、川村清志	31	6-14	2011、河村侑希	58	11-14	2012、川村清志	77
0-2	2017、川村清志	7	3-15	2012、川村清志	32	6-15	2011、金澤 栞	59	11-15	2011、河村侑希	78
0-3	2012、岩谷浩史	8,9	3-16	2011、川村清志	32	6-16	2011、金澤 栞	59	11-16	2011、河村侑希	78
0-4	2017、川村清志	10	3-17	2012、川村清志	32	6-17	2008、川村清志	60,61	11-17	2011、河村侑希	78
0-5	2017、川村清志	10	3-18	2017、川村清志	33	6-18	2008、川村清志	61	11-18	2011、川村清志	78
0-6	2017、川村清志	10	3-19	2017、川村清志	34,5	7-0	2011、金澤 栞	62,63	11-19	2011、川村清志	79
1-0	2012、川村清志	11	4-0	2012、川村清志	36	7-1	2012、川村清志	62	11-20	2011、川村清志	79
1-1	2012、川村清志	12	4-1	2011、寺二奉代	38	7-2	2011、河村侑希	62	11-21	2011、川村清志	79
1-2	2012、川村清志	12	4-2	2011、寺二奉代	38	7-3	2011、河村侑希	62	11-22	2017、川村清志	79
1-3	2012、川村清志	12	4-3	2011、寺二奉代	38	7-4	2008、岩谷浩史	63	11-23	2009、島本招次	79
1-4	2010、川村清志	13	4-4	2012、川村清志	39	7-5	2011、岩谷浩史	63	11-24	2011、川村清志	80
1-5	2012、川村清志	13	4-5	2012、川村清志	39	7-6	2011、金澤 栞	63	11-25	2011、川村清志	80
1-6	2012、川村清志	13	4-6	2011、河村侑希	39	7-7	2013、川村清志	63	11-26	2011、川村清志	80
1-7	2010、川村清志	13	4-7	2012、川村清志	39	8-0	2017、川村清志	64	11-27	2017、川村清志	82
1-8	2003、川村清志	14	4-8	2012、川村清志	40	8-1	2017、川村清志	64	11-28	2012、川村清志	82
1-9	2012、川村清志	14	4-9	2012、川村清志	40	8-2	2012、川村清志	64	11-29	2012、川村清志	82
1-10	2012、川村清志	14	4-10	2012、川村清志	40	9-0	2012、川村清志	65	11-30	2008、島本招次	82
1-11	2010、川村清志	15	4-11	2011、金澤 栞	41	9-1	2011、金澤 栞	66	11-31	2017、川村清志	82
1-12	2011、川村清志	15	4-12	2011、金澤 栞	41	9-2	2017、川村清志	66	11-32	2008、川村清志	82
1-13	2017、川村清志	15	4-13	2012、川村清志	41	9-3	2017、川村清志	66	12-0	2012、川村清志	83
1-14	2005、川村清志	16	4-14	2011、金澤 栞	41	9-4	2017、川村清志	67	12-1	2017、川村清志	86
1-15	2012、川村清志	16	4-15	2012、川村清志	42	9-5	2017、川村清志	67	12-2	2017、川村清志	86
1-16	2011、川村清志	16	4-16	2012、川村清志	42	9-6	2017、川村清志	67	12-3	2011、川村清志	86
1-17	2017、小谷奉之	16	4-17	2012、川村清志	42	9-7	2017、川村清志	67	12-4	2011、河村侑希	86
1-18	2011、川村清志	17	4-18	2012、川村清志	43	9-8	2017、川村清志	68	12-5	2011、金澤 栞	87
1-19	2003、川村清志	17	4-19	2012、川村清志	43	9-9	2017、川村清志	68	12-6	2011、河村侑希	87
1-20	2005、川村清志	17	4-20	2012、川村清志	43	9-10	2011、金澤 栞	68	12-7	2011、金澤 栞	87
1-21	2011、川村清志	17	5-0	2011、金澤 栞	46	10-0	2017、川村清志	69	12-8	2011、河村侑希	88
2-0	2017、川島大和	18	5-1	2012、川村清志	47	10-1	2013、川村清志	70	12-9	2011、金澤 栞	88
2-1	2012、川村清志	20	5-2	2012、川村清志	47	10-2	2011、川村清志	70	12-10	2011、金澤 栞	88
2-2	2012、川村清志	20	5-3	2012、川村清志	47	10-3	2011、川村清志	70	12-11	2011、金澤 栞	88
2-3	2012、川村清志	20	5-4	2011、川村清志	47	10-4	2013、川村清志	70	12-12	2013、川村清志	89
2-4	2013、島本招次	20	5-5	2011、河村侑希	47	10-5	2011、川村清志	70	12-13	2011、金澤 栞	89
2-5	2013、島本招次	20	5-6	2011、川村清志	48	10-6	2011、川村清志	70	12-14	2011、金澤 栞	89
2-6	2013、島本招次	20	5-7	2017、川村清志	48	10-7	2008、島本招次	71	12-15	2011、金澤 栞	89
2-7	2012、川村清志	21	5-8	2017、川村清志	48	10-8	2013、川村清志	71	12-16	2011、川村清志	90,91
2-8	2011、金澤 栞	21	5-9	2017、川村清志	48	10-9	2011、川村清志	71	12-17	2011、金澤 栞	92
2-9	2011、川村清志	21	5-10	2017、川村清志	49	10-10	2011、川村清志	71	12-18	2011、川村清志	92
2-10	2012、川村清志	22	5-11	2017、川村清志	49	10-11	2008、島本招次	72	12-19	2011、金澤 栞	92
2-11	2012、川村清志	22	5-12	2017、川村清志	49	10-12	2011、川村清志	72	12-20	2008、川村清志	92
2-12	2012、川村清志	22	5-13	2012、川村清志	50	10-13	2013、川村清志	72	12-21	2011、川村清志	93
2-13	2012、川村清志	22	5-14	2017、川村清志	50	10-14	2011、川村清志	72	12-22	2011、岩谷浩史	93
2-14	2012、川村清志	22	5-15	2010、川村清志	50	10-15	2011、川村清志	72			
2-15	2012、川村清志	24	5-16	2017、川村清志	51	10-16	2013、川村清志	73			
2-16	2017、川村清志	24	5-17	2017、川村清志	51	10-17	2013、川村清志	73			
2-17	2017、川村清志	25	5-18	2017、川村清志	51	10-18	2011、川村清志	73			
3-0	2012、川村清志	26,27	6-0	2017、川村清志	52,53	11-0	2011、河村侑希	74			
3-1	2017、小谷奉之	28	6-1	2013、川村清志	53	11-1	2010、川村清志	75			
3-2	2017、川村清志	28	6-2	2017、川村清志	53	11-2	2017、川村清志	75			
3-3	2017、川村清志	29	6-3	2017、川村清志	53	11-3	2009、島本招次	75			
3-4	2017、川村清志	29	6-4	2017、川村清志	54	11-4	2017、川村清志	76			
3-5	2017、島本真吾	29	6-5	2017、川村清志	54	11-5	2011、河村侑希	76			
3-6	2017、川村清志	29	6-6	2017、川村清志	55	11-6	2011、岩谷浩史	76			
3-7	2012、川村清志	30	6-7	2017、川村清志	55	11-7	2011、岩谷浩史	76			
3-8	2012、川村清志	30	6-8	2013、川村清志	56	11-8	2010、岩谷浩史	76			
3-9	2012、川村清志	30	6-9	2011、河村侑希	56	11-9	2012、川村清志	76			
3-10	2012、川村清志	30	6-10	2008、川村清志	56	11-10	2011、河村侑希	77			
3-11	2012、川村清志	31	6-11	2017、川村清志	58	11-11	2011、河村侑希	77			
3-12	2012、川村清志	31	6-12	2008、川村清志	58	11-12	2011、河村侑希	77			

編著

川村清志

国立歴史民俗博物館・准教授

倉本啓之

皆月青年会元会長

監修

小池淳一

国立歴史民俗博物館・教授

葉山茂

国立歴史民俗博物館・特任助教

編集協力

皆月日吉神社

皆月青年会

皆月山王権現太鼓保存会

伏見孝一

皆月区長

番場誠

五十洲神社宮司、皆月日吉神社権宮司、
七浦公民館館長

島本真吾

皆月青年会元会長

小谷奉之

皆月青年会前会長

竹田健一

皆月青年会副会長

升本一理

皆月青年会副会長

小谷紘樹

皆月青年会役員

写真撮影、提供

川村清志

岩谷洋史

神戸大学非常勤講師

金澤 栞

札幌大学文化学部生（当時）

河村侑希

札幌大学文化学部生（当時）

川島大和

皆月青年会会長

小谷奉之

島本招次

皆月日吉神社元氏子総代

島本真吾

寺二奉代

皆月青年会元会長

※本ブックレットの制作、校正を行った二〇一八年度の調査研究については、科学研究費「文化の主体的継承のための民俗誌の構築―マルチメディアの活用と協働作業を通じて―」（研究課題／領域番号18H00789）の助成を受けた。



輪島市皆月日吉神社山王祭

フォトエスノグラフィー 準備編

編集・発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館©
〒 285-8502 千葉県佐倉市城内町 117
TEL 043-486-0123 (代表)

印刷・製本 株式会社弘文社 2018 年 8 月 30 日

